バートルビー

私、もう年寄と云つてもよい年齢の男です。仕事柄、この三十年間といふもの、興味深くもやや奇矯にも思へる連中と普通以上の附合をして參りましたが、私の知る限り、彼等については何の記錄も殘されてをりますまい——彼等とは詰り、法律文書の筆耕、すなはち代書人の事です。仕事の上でも個人的にも、彼等との附合は隨分多く、その氣になれば彼等について色々お話して差上げる事も可能です。それを聽いて、氣の良い方なら微笑みを洩らされるでせうし、感じ易い方なら貰ひ泣きされるかもしれません。しかし、私としては、バートルビーの生涯について幾らか紙筆を費す事が出來るならば、他の全ての代書人の生涯について語るのを諦めても構はないとさへ思つてゐます。と云ひますのも、バートルビーのやうな風變りな代書人には、これ迄ただの一度も出會つた例しがなく、その噂を耳にした事すらないからです。他の代書人についてならば、或は完璧な傳記を物する事も可能かも知れません。が、バートルビーについては、そんな事は到底出來ない。この男について充分かつ完璧な傳記を書くための資料は何一つ存在してゐないに相違なく、これは文藝の世界にとつて取返しのつかぬ損失と云はねばなりません。バートルビーといふのは、本人の口から直接聞き出さない限り、確かな事は何一つ解らない類の人間なのですが、何しろその本人たる彼がごくごく僅かしか語つてくれない

のですから。私が自らのこの目で非常な驚きを覺えつつバートルビをちかに見て知つた事、それが彼について私の知る全てなのです。尤も、一つあやふやな風聞があるにはありますが、それについてはいづれ觸(ふ)れる事に致しませう。

この代書人が初めて私の前に姿をあらはした時の模様を御紹介する前に、私自身の事や、私の雇ひ人達、仕事内容、事務所の様子、周圍の狀況等について多少說明して置く方がよろしいでせう。それをやつて置かないと、これから登場願ふ主役の事が充分理解して頂けないでせうから。で、まづはかく云ふ私の事ですが、私といふ人間は、若い時分から今日に至る迄、惱み事の最も少い人生こそ最上の人生と深く信じて參りました。さういふ次第で、多大の精力と神經とを要する事で知られる職業に自らたづさはり、時には大悶著(もんちやく)に捲き込まれたりしながらも、それがために精神の安寧が脅かされるやうな事態などは一度として許容した事がありません。この私は名望なんぞにまるで關心のない辯護士で、陪審員に向つて派手に演說をぶつ事も絕えてなければ、世間の喝采を當(あ)てにするやうな振舞も決してせず、居心地の良い隱れ處(が)の落著いてひつそりとした雰圍氣の中で、裕福な人々の債券だの抵當證書だの權利證だのに圍(かこ)まれながら氣持よく仕事をしてゐる次第です。私を知る限りの人は誰もみな、私の事を何處(どこ)までも

「安全」な男と思つてゐます。今は亡きかのジョン・ジェイコブ・アスター氏（米國の資本家・毛皮商人で、一八三四年の引退時には米國一の富豪と云はれた。一七六三～一八四八）は、詩人的熱情とは凡そ無縁の御仁でしたが、それだけに、私の第一の美點は愼重、第二のそれは几帳面だと、誰憚る事なく云ひ切つて下さつた。自慢の積りで申上げてゐるのではありません。ただ、私が故ジョン・ジェイコブ・アスター氏の恩顧を辱なくした事があつたといふ事實を御傳へしたかつた迄の事。それに、白狀しますと、あの方のお名前、あの、まろやかでいかにも圓滿な感じで、純金のごとくに耳に響く御名前を、私、いつも口に出して繰返してみたくなるのです。更に、遠慮なく附け加へさせて頂けるならば、故ジョン・ジェイコブ・アスター氏の如き方から高い評價を頂戴したといふ事は、私の欣快とするところなのでございます。

これから物語るささやかな出來事が起る少し前、私は仕事の規模をかなり擴大してをりました。今はここニューヨーク州では廢止されて仕舞ひましたが、衡平法裁判所主事といふ、古き良き職務が私に與へられてゐたのです。さして骨の折れる仕事でもないのに、實入りのよいのには實に嬉しい思ひをさせられました。私は腹を立てる事は滅多にないし、ましてや、我が身の危險をも顧みず世の不正や不法に烈しく憤るなどといふやうな眞似はまづやつた例しがあり

ません。ですが、ここはひとつ性急な物云ひをお許し願つて、新憲法が衡平法裁判所主事なる職務を突如亂暴に廢止して仕舞つたのは如何にも早まつた所業だとしか思へないと、何としても申し上げねばならない。何しろ、私は終身の收益を當て込んでゐたのに、僅か數年間の收益しか受取れなかつたのですから。が、まあ、これは餘談です。

私の事務所はウォール街某番地に立つ建物の二階にありました。事務所の一方の端に立つと、建物を上下に貫通してゐる採光用の廣(ひろ)い吹き抜けの白い内壁が見えました。

その眺めは風景畫家のいはゆる「生氣」なるものを缺(か)いてゐて、どちらかと云へば無味乾燥な印象を與へてゐたと云つてよろしいでせう。しかし、それは事實さうだとしても、事務所のもう一方の端に立つと、少くともそれとはコントラストを成してゐる、といふ程度の事は云つてもよいやうな光景が展開されてをりました。そちら側の窓から外を見てみると、高々と聳える煉瓦壁がまるごとすつかり眺められ、歳月のせゐもあり、いつも日が射さないせゐもあつて、それは黑ずんで見えましたが、望遠鏡なんぞを持ち出さなくても、壁の隱れた諸々の美を賞翫(しやうぐわん)するには充分でした。何しろ、近眼の見物人にも無理なく眺められるぐらゐ、壁は私の事務所の窓ガラスから十フィート足らずの近さにまで迫つてゐたのですから。周圍の建物が極

めて高く、私の事務所が二階にあつたため、向うの壁とこちらの壁との間の空間は何やら巨大な四角の貯水槽みたいに見えたものです。

バートルビーの出現に先立つ直前の時期、私は代書人として二人の人物を、給仕として一人の有望な若者を雇つてゐました。まづは、ターキー（七面鳥の意。役立たず、愚か者の意もあり）、次に、ニッパーズ（針金などを切つたり挟んだりする道具の意。代書人ニッパーズの齒軋りする癖からの聯想か）、最後にジンジャー・ナット（生姜入り菓子の意）の三人です。通常、人名簿には見出せない類の名前のやうに思へませうが、實はこれは三人がお互ひに附け合つた綽名で、それぞれの容貌や爲人をうまく表現してゐるやうに思はれてゐたのです。ターキーは背が低く太つたイギリス人で、ほぼ私と同年齢――詰り、六十に手が屆きさうな年齢でした。午前中、彼の顔はすこぶる綺麗な櫻色をしてゐるのですが、正午の十二時――詰り彼の午餐の時――を過ぎると、それはあたかもクリスマスの季節に石炭をたつぷりくべた暖爐さながらに燃え盛り、燃え續ける――が、さうして云はばゆつくりと火勢を衰へさせながら――午後の六時かその邊りの時刻を迎へる事になる。さうすると、その時刻以降、この顔の持主は事務所からゐなくなつて仕舞ひます。この顔は太陽と共に絶頂に達し、太陽と共に沒し去るものであるらしく、翌日もまた同様に規則正しく衰へぬ輝きを示しながら改めて昇つて來て、頂點に達し、衰へて行くの

です。私は我が人生の行路に於て、奇怪な暗合の類に隨分澤山回り逢つたものですが、その中でも特筆に値するのが、ターキーがその赤々と輝く顏面から最大限の光を發射した丁度その時、それがまた決定的な瞬間でもある譯ですが、正にその刹那、日毎の周期の次の段階が始まつて、その後一日が終る迄、私の見るところ、彼の仕事の能力に著しい亂れが生じたといふ事實であります。彼がどうしやうもなく怠慢になつたとか、仕事をひどく嫌がるやうになつたとかいふのではありません。寧ろ逆で、彼はともすれば無闇矢鱈に精力的になつて仕舞ふので、私としては大いに閉口させられたものです。何しろ、異様なまでに昂ぶつて、忙しなく動きまはり、何とも突飛かつ無鐵砲に振舞ふのですから。ペンをインク壺に浸すのも實に亂暴でした。私の書類に彼が落したインクの染みは、全て正午の十二時以降のものです。實際、午後になると、彼は無鐵砲になつて、インクの染み作りに精を出したばかりではありません。日によつては、そんな程度では收まらず、やけに騷々しくなりました。そんな時にも、彼の顏は燃えやすい燭炭を無煙炭の上に澤山くべでもしたかのやうに、一層華やかに燃え盛つてゐるのです。椅子をがたがた云はせて不愉快な音を立てる。インクを乾かす砂入れの砂をまき散らす。鵞ペンの先を削つてゐる裡に苛々して來て、滅茶苦茶にした擧句、突如癇癪を起して床に抛り

投げる。立上つて机の上に屈(かが)み込み、いとも見苦しい恰好で書類を掻きまはす。彼のやうな年輩の人間のさういふ姿は見るも歎(なげ)かはしいものでした。とは云ふものの、多くの點で彼は私にとつて極めて有用な人物だつたし、正午の十二時前にはどんな時にもこの上なく明敏かつ著實な態度を示し、餘人(よじん)をもつて代へ難い仕事振りで、澤山の仕事をこなしてくれました――さういふ譯で、私は彼の奇癖を喜んで大目に見た次第です。尤も、無論、時には苦言を呈する事もありました。とは云へ、その場合、言葉遣ひは飽く迄も穩やかに。と云ふのも、午前中の彼は實に禮儀(れいぎ)正しく、否、それどころか、誰にも眞似が出來無いほど人當りがよく、恭(うやうや)しげに振舞つてゐるのに、午後になると、何か腹の立つ事があつたりすると、些か言葉遣ひが亂暴に――實を云へば、傲慢不遜(がうまんふそん)になつたりしがちだつたからです。ところで、私は午前中の彼の働きぶりは眞實高く評價し、それが失はれるやうな事はすまいと心に決めてをりました――とは云へ、同時に、正午以降の彼の火のついたやうな振舞には困惑させられた事は勿論ですが――私、何しろ平和を好む人間ですし、下手に說教でもして不穩當(ふをんたう)な反擊でもくらふ事になつては堪らないと思ひましたから、ある土曜日の正午（彼はいつも土曜日に症狀がひどくなるのです）、意を決して、甚だ穩やかに、それとなくかう云つてやつたのです。君もそろそろ年なのだか

ら、仕事の量を減らした方がよくはないかね、と。すなはち、十二時を過ぎたらもう事務所に戻る必要はなく、晝食を濟ませたら家に戻つて、夕方のお茶の時間までゆつくり休んだらよいのではないかね、と。ところが、返答は否でした。午後の勤務を何としても續けたいといふのです。奴さん、顔を恐ろしく眞つ赤にして――部屋の向う側の端つこで、長い定規をふりまはし身振り手振りを交へながら――私に向つて捲し立てたものです、自分が午前中にそんなにも役に立つてゐるならば、午後にはそれこそ無くてはならぬ筈ではないか、と。

「失禮ながら」と、その折ターキーは云ひました。「小生は所長の右腕をもつて任じてをります。午前中は我が隊列を整へ展開させるだけでありますが、午後には自ら陣頭に立つて、敵陣めがけて勇猛果敢に突撃する、これ、こんなふうに」――さう云ひながら、彼は定規を激しく前に突き出してみせるのでした。

「しかし、ターキー、インクの染みがねえ」と、さりげなく私は申しました。

「いかにも、仰有るとほり。が、失禮ながら、我が頭髪を御覽あれ。そろそろ私も年です。暖かい晝下がりに、染みの一つや二つ拵へたところで、この胡麻鹽頭が嚴しく咎められるほどの事でもありますまい。老年といふものは――縱令頁を染みで汚しても――敬せられて然るべき

ものです。失禮ながら、我々は二人とも老いつつある身なのですぞ」。

我が同胞意識にこんなふうに訴へられては、なかなか抵抗する事は難しい。いづれにせよ、彼が午後も留まる氣でゐる事はよく解りました。そこで、私としては彼の意思に任せる事にする一方、午後の間は餘(あま)り重要でない書類を扱はせる事に心を決めた次第です。

雇ひ人の二番目のニッパーズは、蒼白い顔に頬髭を生やしてゐて、全體としてどことなく海賊を思はせるやうな風貌で、年齢は二十五歳くらゐ。彼は野心と消化不良といふ二つの惡の力の犧牲者なのだと、私はいつも思つてゐました。ただの代書人の仕事を慊(あきた)らず思ひ、苛立つてゐて、法律文書の原案作成といふが如き、飽く迄も專門的な仕事にまで嘴(くちばし)を突込んで、辯護の餘地なき越權行爲をあへて爲さうとするやうな所に、彼の野心が如實(にょじつ)に示されてをりました。消化不良の方の症狀は、彼が時々苛々として怒りつぽくなり、齒を剝出(むきだ)しにして癇癪(かんしゃく)を起したりする態度にあらはれてゐたやうに思ひます。何しろ、筆寫を間違つたりすると、音を立てて齒軋(はぎし)りをするし、仕事の眞つ最中に餘計な惡態をつくのですが、それもちやんと言葉にして云ふのではなく、シーッと云つて彌次(やじ)でも飛ばすやうな妙な音を立てるし、何よりも、自分の仕事机の高さに引切(ひっきり)無(な)しに文句を云ふのです。大變器用で手仕事の才のある男なのに、机を自分

の氣に入るやうな高さにする事がどうしても出來ない。机の脚の下に木つ端を詰めたり、色んな種類の木片とかボール紙の小片とかを入れてみたり、擧句の果は、吸取紙を折り畳めるだけ折り畳んで、それを用ゐて絶妙の調節を試みさへしたものです。それなのに、どんな工夫も效を奏さない。背中を樂にするために、机の上板を急角度に傾け、上板の手前の縁が顎に屆くくらゐまで高くして、あたかもオランダの家屋の急勾配の屋根を書物机に使つてゐるやうな具合にして、そんな狀態で字を書いてみるのですが、さうすると、腕の血の廻りが惡くなつたと宣ふ。そこで今度は、机を腰のベルトの邊りまで低くして、その上に屈み込むやうにして書いてみる。すると、背中がひどく痛む事になる、といつた按配。要するに、事の眞相は、ニッパーズが己れが何を欲してゐるのかを分つてゐなかつたのです。或はそれとも、彼が何かを欲してゐたとするならば、それは代書人用の机と綺麗さつぱり縁を切りたいといふ事でした。彼の病的な野心は樣々な形で現れましたが、例へば彼は身形の見窄らしい胡散臭い連中が訪ねて來るのを喜びました。自分の依頼人だと申してをりました。實際、彼が時に私どもの居住する區の顏役風を吹かせてゐたばかりか、時々裁判所にも出入りしてゐて、例の「墓場」（ニューヨーク市刑務所の通稱。エジプトの聖廟に似た造りの石造建築だつたため、その名がある）邊りでも滿更知られてゐない顏でもないといふ事は、私も承知してゐました。

しかし、事務所に彼を訪ねて來た一人の人物は自分の依賴人だと、ニッパーズは勿體ぶつた態度で云ひ張りましたが、實は借金取りでしかなく、彼の云ふ不動產の權利證書なるものも請求書でしかなかつたと、さう信じて間違ひないと私は思つてゐます。とは云ふものの、その全ての缺點や、彼ゆゑに被つた樣々な迷惑にも拘らず、ニッパーズは彼の同僚のターキー同樣、私にとつては極めて有用な人間でした。綺麗な字を速く書けるし、その氣になれば紳士めいた立居振舞も不可能ではありません。加ふるに、いつも紳士然たる身形をしてゐましたから、それと意圖せずして私の事務所の評判を上げてくれるといふ御利益もありました。ところが、ターキーとなると、事務所の不名譽にならないやうにして貰ふために、私は隨分苦勞させられたものです。何しろ彼の衣服と來たら油染みて見える事が多かつたし、よく安食堂の臭ひがした。夏のズボンはだぶだぶでだらしなく、上衣はそれこそ言語道斷、帽子は觸る氣もしなくなるやうな代物でした。もつとも、帽子なんぞ私にはどうでもよかつた。いかにも雇はれ人のイギリス人らしく、彼は禮儀正しく慇懃な態度を生れつき身につけてゐたので、部屋に入るや否や必ず帽子を脫ぐ習ひでしたから。けれども、上衣となると話は別でした。上衣の事で私は隨分彼に談じ込んだものです。が、效果はなかつた。收入の乏しい彼のやうな人間にとつて、顏をあ

んなにも光り輝かせた上、上衣までもつやつやと輝かせられる餘裕はなかつたといふのが本當のところでしたらう。かつてニッパーズが云つてゐたやうに、ターキーの所持金は主として安い赤ワイン代に消えました。ある冬の日、私はターキーに自分の頗る上等な上衣を進呈しました——綿入れのグレーの上衣で、溫かくて著心地がよく、膝の邊りから首のところまでしつかりボタンがついてゐる奴です。きつとターキーは私の好意を有難く思つて、午後の無鐵砲で騷々しい態度を緩和してくれるだらうと私は期待しました。ところが、さうはならなかつた。ふはふはと柔らかい毛布みたいな上衣を、ボタンをしつかりかけて著込んだ事が、彼に惡影響を及ぼしたとしか考へられません——多すぎる燕麦は馬にかへつて有害だと云ひますが、それと同じ原理です。實際、落著きが無く扱ひ難い馬に燕麦を食はせると、一層手に負へなくなるものですが、それと同じく、ターキーには上衣の效き目が强過ぎたのです。彼はやけに横柄になりました。彼は豐かさによつて害されて仕舞ふ類の人間だつたのです。

ターキーの氣隨氣儘な性癖に關しては、私は私なりにあれこれ憶測をめぐらしましたが、ニッパーズについては、他の面で如何に缺點があるにせよ、少くとも節度を辨へた青年だとばかり思ひ込んでゐました。ところが、實際は、母なる自然が葡萄酒釀造業者よろしく彼に酒精

を提供してくれたらしく、生れ落ちたその時に、激し易い、強いブランデーさながらの氣質をたつぷり仕込まれたので、それ以降は酒を飲む必要も全くありはしなかつたのです。私の靜かな事務所のただ中で、ニッパーズはよく苛立たしげに椅子から立上つて机の上に屈み込み、兩腕を大きく廣げて机全體をむんずとつかみ、あたかも机がわざと彼を困らせ惱ませる意地の惡い生き物でもあるかのやうに、床の上を荒々しくこすりながら、机を動かしたり、急に突いて押したりしたものですが、さういふ彼の様子を見てゐると、ニッパーズには水で割つたブランデーさへ全然餘計なものだと、私ははつきり悟らされました。

ニッパーズの過敏性及びその結果としての興奮が消化不良といふ特異な原因によるものだつたため、主として午前中に症狀があらはれ、午後になると彼が比較的穩和になつたといふ事は私にとつて幸運でした。と云ふのも、ターキーの發作の方は正午頃にしか起らないため、二人の奇癖を一度に引受ける必要が無かつたからです。衞兵みたいに、二人は代はり番こに發作を起してくれた譯で、ニッパーズが當番の時、ターキーは非番となり、その逆にもなつたといふ次第。事情が事情だつただけに、洵に有難い天の配劑でありました。

三番目の雇ひ人、ジンジャー・ナットは十二歳くらゐの少年です。父親は荷馬車の馭者で、

息子が馭者席にではなく、裁判官席に坐つてゐる姿を一目見てから死にたいと切望してゐました。そこで、息子は私の事務所に寄越される事になり、週一弗の俸給で、使ひ走りをしたり掃除をしたりする傍ら、法律の勉強もしてゐたのです。少年は自分用の小机も貰つてゐましたが、餘り使ふ事はなかつた。抽斗を調べてみたら、様々なナッツの殻がずらりと勢揃ひしてゐました。實際、この機敏な少年にとつては、高遠なる法律學の全體が一つのちつぽけなナッツの殻にそつくり納まつてゐたのです。ジンジャー・ナットは極めて手際よく自らの仕事を片付ける傍ら、ターキーとニッパーズのために菓子と林檎とを調達せねばならず、これがなかなか重要な役目でした。御承知の通り、法律文書を書き寫すといふのは無味乾燥もよいところで、實に潤ひに乏しい作業ですから、私の二人の代書人は、税關と郵便局の入つてゐる建物の近くに群る屋臺から冬林檎を手に入れ、それでしよつちゆう口に潤ひを與へざるを得なかつた。それにまた、二人はかの妙な御菓子——平たくて小さい、丸くてとても香ばしい御菓子を買ひ求めさせるべく、ジンジャー・ナットを極めて頻繁に使ひにやりました。その菓子の名前が少年の綽名になつたといふ譯です。仕事が退屈で遣り切れない寒い朝など、ターキーはこれらの菓子を、只のウェファースみたいに何十個となく貪り喰らひましたが——實際、一セントも出せ

ば、六個や八個くらゐは買へたのです――そんな時には、ペンを忙しなく走らせる音と、口の中で菓子をぱりぱり音を立てて嚙み碎く音とが一緒になつて聞えて來たものです。ターキーは午後になると眞つ赤に燃え立ち、數知れぬ失敗をやらかし、いとも輕率な振舞に及んだものですが、ある時など、例のジンジャー菓子を唇の間に挾んで濕らせ、印章の積りで抵當證書にぺたりと押しつけたではありませんか。その時には、流石に私もすんでのところで彼を馘にするところでした。ところが、奴さん、私の氣持を宥めるべく、東洋風に深々と御辭儀をして、かう宣つたものです。「失禮ながら、小生も隨分と氣前がよいもんで。何しろ、自腹を切つて文房具を支給して差上げた譯で」。

ところで、私の本業たる不動產讓渡の仲介、權利證書の探索、及び、あらゆる種類の面倒な書類の作成の仕事は、主事の職務を引受けた事によつて大幅に增える事になりました。今や代書人達も大忙しの狀態となり、私は現在ゐる雇人を督勵せねばならないだけでなく、新たに人手を增やさねばならなくなつた。

私の求人廣告に應じて、或る朝、一人の物靜かな靑年が事務所の入口に姿を現しました。夏だつたので、ドアは開け放しにしてあつたのです。その時の彼の姿を、今も私はありありと目

に浮べる事が出來る――蒼白で端整（たんせい）な顔付、痛ましいほどに高潔で、絶望的なまでに孤影悄然（こえいせうぜん）たるその姿！　それがバートルビーでした。

資格に關して二言三言質（ただ）した後、私は彼を雇ふ事にしました。わが代書人の隊列にかくも竝外れて物靜かな樣子の男が加はるといふのは、私にとつて喜ばしい事でした。ターキーの輕躁（けいさう）な氣質やニッパーズの激し易い氣質に好影響を與へるかもしれないと考へたからです。

前もつて申し上げるべきでしたが、私の事務所は磨（す）りガラスのアコーディオン・ドアで二つに區分されてゐて、その一方は代書人達が、もう一方は私が使用してをり、氣分次第でドアを開け放つたり閉ぢたりしてをりました。バートルビーの席としては、ドアの傍の一隅を割當てる事に決めました。それも私に近い場所に坐らせて、何かちょつとした用事を賴みたい時など、この大人しい男に、呼べばすぐに聞えるやうな場所にゐて欲しいと思つた譯です。彼の机は、その一隅にある小さな傍窓（わきまど）のすぐ近くに据ゑる事にしました。その窓越しに目をやると、以前は穢（きたな）らしい裏庭や煉瓦壁が幾つも見えたものですが、その後、次々に建物が建てられて、今は光こそ多少入つて來るものの、外の景色は何も見えなくなつて仕舞ひました。建物の壁が窓から三フィートも無いところに迫つてゐて、光はあたかも圓蓋（ゑんがい）の天井に作られたごく小さな

穴を通つてでも來るかのやうに、頭上の遙か上の方から、二つのとても高い建物の間を拔けて射し込んで來るのでした。事務所の配置を更に滿足すべきものにするために、私は丈の高い綠色の折り畳み式の衝立を調達して、私の視界からバートルビーを完全に隱して仕舞ふ一方、私の聲は彼に屆く樣な具合にしました。かうして、云はば、プライヴァシーと共同生活とを一つに結合させた譯です。

最初の頃、バートルビーは驚嘆すべき量の仕事をこなしました。長い間筆寫の仕事に飢ゑてでもゐたかのやうに、私の書類を貪り喰つてゐるやうな感じでした。消化の暇も何もあつたものではない。晝夜を分たず仕事を續け、日光の下でも燈火の下でも筆寫をやめない。彼が嬉々として勤勉に働いてくれてゐたのなら、彼の精勤ぶりを私は大いに喜んだ事でせう。けれども、彼は一言も口を利かず、蒼ざめた顏をして、いかにも機械的に書き續けてゐたのです。

書類を正確に筆寫したかどうか、一語一語確認するのは代書人の仕事の不可缺の要素をなしてゐる事は申す迄もありません。事務所に二人以上の代書人がゐる場合、一人は寫しを讀み上げ、もう一人は原文を手に持ち、助け合つて點檢作業を行ふ事となる譯ですが、それは實に詰らなく、無味乾燥で眠氣を催す作業ですから、多血質の人間にとつては殆ど耐へ難からうとは

容易に察しがつきます。たとへば、かの血氣盛んな詩人バイロン（英國のロマン派詩人。一七八八～一八二四）がバートルビーと机を竝べて、ひどく癖のある字でびつしりと書かれた五百頁にも及ぶ法律文書を點檢する作業に甘んじられようなどとは、私には到底信じられない。

時々、仕事を急がねばならないやうな時には、私はターキーかニッパーズを呼びつけて、短い文書を讀み合はせる手助けを自ら買つて出るやうな事もよくやつたものです。私がバートルビーを衝立の後ろの手近な場所に坐らせたといふのも、その目的の一つは、さういふちよつとした用事のために彼の手が借りられるやうにする事にありました。彼が來てから三日目の事だつたと思ひます。彼が筆寫した文書を點檢する必要が生じる以前の事でしたが、手持ちの小さな用件を大急ぎで片づけねばならなくなつて、突如、私はバートルビーに聲をかけました。急いでゐたし、即座に應諾の返事があるものと、當然期待してゐましたから、私は坐つたまま机上の原本を睨みつつ、寫しを攫んだ右手をやや苛立たしげに横に伸ばしてをりました。バートルビーが衝立の陰から出て來たら、すぐ様その寫しを引つ攫んで、時を移さず仕事に取り掛つてくれるものとてつきり思ひ込んでゐた譯です。

彼に聲をかけた時の姿勢の儘で、私は彼に向つて早口で、何をやつて欲しいのかを――詰

り、一緒にちよつとした書類を點檢(てんけん)して欲しいといふ事を申しました。バートルビーが自分の居場所から動かうともせず、いかにも穏やかながら、きつぱりした聲で、「その氣になれません」、と答へた時の私の驚きを、否、ひどい仰天ぶりを御想像願ひたい。

私は暫し一言も口を利かず、この衝撃から立ち直らんものと、じつと坐つた儘でをりました。と、忽ち、こんな考へが私の頭に閃(ひらめ)いた。私が聞き違ひをしたか、バートルビーが私の意圖を完全に誤解したか、きつとそのどちらかに違ひない。そこで、私は能ふる限り明瞭な口調で私の用件を繰返しました。けれども、同じく明瞭な口調で、彼は前と同じ答、「その氣になれません」、を返して來たのです。

「その氣になれないだつて」と、鸚鵡(あうむ)返しに私は叫びながら、すつかり興奮して立上り、大股に部屋を横切つて行きました。「どういふ積りなんだ。氣でも狂つたのか。この書類の照合を手傳つて欲しいと云つてゐるんだ――これだよ」、さう云つて、私は書類を彼に突きつけました。

「その氣になれません」との返事でした。

私はまじまじと彼の顔を見詰めました。痩せこけた彼の顔は落著いてゐて、生氣の無い灰色

の目は穏やかでした。ごく僅かの動揺の色も看て取る事は出來ない。彼の態度に少しでも不安、怒り、苛立ち、不遜の色が見えたならば、詰り普通の人間らしさが少しでもあつたならば、疑ひもなく、私は無理やりにでも彼を事務所から叩き出してゐたでせう。けれども、なにしろ彼の様子が様子でしたから、私の生白い石膏のキケロ（古代ローマの政治家、雄辯家、著述家。屢々法律家の模範とされる。前一〇六～四三）像を外に叩き出す事でも考へた方が、まだしもなくらゐでした。私は暫く立つた儘、自分の仕事を續ける彼を見詰めてゐて、それから自分の机に戻りました。何とも妙だ、と私は思つた。どうすればよいだらう？　しかし、私は仕事に急かされてゐましたから、差當りこの件については忘れる事にして、後で餘裕のある時に考へようと心を決め、隣りの部屋からニッパーズを呼びつけて、讀み合はせを手早く片付けました。

それから數日經つて、バートルビは長い書類を四部寫し終へました。衡平法裁判所で私の前で行はれた證言一週間分の、四部の寫しです。讀み合はせをする事が必要となりました。重要な訴訟だつたので、間違ひは決して許されません。全ての手筈を整へてから、まづ私はターキーとニッパーズとジンジャー・ナットを隣室から呼びました。私が原本から讀み上げてゐる間、四人の配下の手に一部づつ寫しを持つてゐて貰はうと思つた譯です。さういふ次第で、

ターキー、ニッパーズ、ジンジャー・ナットが一部づつ手に持つて竝んで席に著いたので、この興味深い仲間に加はるやうにと、私はバートルビーにも聲を掛けました。

「バートルビー、來てくれ。急ぎ給へ。待つてゐるんだから」。

絨緞の敷いてゐない床を、彼の椅子の脚がゆつくりとこする音が聞え、まもなく彼が自分の隱れ處の入口に立ちました。

「何の御用で？」と、穩やかに彼。

「書類の寫し、寫しだよ」、私はせかせかした口調でさう云ふと、「これからみんなで讀み合はせをするんだ。ほら、これだ」と云つて、彼に四番目の寫しを差し出しました。

「その氣になれません」と彼は云ふと、靜かに衝立の陰に姿を隱しました。

暫しの間、私は「鹽の柱」（舊約聖書「創世記」第一九章第二六節參照）と化して、竝んで坐る部下達を從へた儘、立ち盡してゐました。我に返ると、私は衝立まで赴いて、かくも尋常ならざる振舞をする理由を云へと迫りました。

「一體どういふ譯なんだ？」

「その氣になれないのです」。

これが他の人間だつたら、私は立所に癇癪を爆發させて、問答無用とばかりに私の面前から叩き出し、面目をまる潰れにしてやつたでせう。けれども、バートルビーには妙に私の怒りを和らげるばかりか、いとも不思議な仕方で私の心の琴線に觸れ、私の胸を搔き亂す何かがあつたのです。私は事を分けて彼を說得しようとしました。

「吾々が讀み合はせをしようとしてゐるのは、君自身が寫した書類だよ。それを四部もろとも一度に片付けて仕舞はうといふのだから、君にとつても勞力の節約になる。これが慣例に從つた遣り方なんだ。代書人は誰だつて、自分の寫した書類の讀み合せに協力する義務がある。さうぢやないかね？　何か云つたらどうかね？　答へ給へ！」

「その氣になれません」と、笛でも吹く樣な調子で、彼が答へました。私が彼に話し掛けてゐる間、彼は私の云ひ分を逐一愼重に吟味し、その意味を充分に理解して、抗ひ難い結論を拒み得ないにも拘らず、それと同時に、何かしら最重要な考慮に支配されてゐて、先のやうな返答をせざるを得なかつたのだと、そんな風な積りでゐるやうに私には思はれました。

「すると君は、私の要望には應じないと決めたのだね――慣例にも常識にも叶つた要望に？」

その點に關して貴方の判斷は正しいと、彼は簡潔に私に理解させました。仰せの通り、翻意

の餘地はない、といふ譯です。

以前に見た事も聞いた事も無いやうな、餘りと云へば餘りに理不盡（りふじん）な遣り方で威壓（いあつ）的に決めつけられると、人は常日頃懷（つねひごろいだ）いてゐる明々白々たる信念に動搖を來し始めるといふ事も珍しい話ではありません。云ふならば、いとも奇怪な事ながら、正義も道理も悉（ことごと）く相手側にあるのではあるまいかと、漠然と思ふやうになるのです。そこで、誰か局外的立場にある人間が近くにゐたりすると、自らのよろめきかけた精神の支へが欲しくて、さういふ人間に助けを求める事になる。

「ターキー」、と私は云ひました。「君はこれをどう思ふ？　私は間違つてゐるかね？」

「失禮ながら、所長」とターキーが、彼に可能な限りのこの上なく穏やかな口調で云ひました。「間違つてゐるなどと、とんでも無い事でございます」。

「ニッパーズ」、と私が云ひました。「君ならば、どう思ふ？」

「あんな奴、俺なら事務所から叩き出してやります」。

（炯眼（けいがん）な讀者ならば、すぐに察する事でありませうが、これは午前中に起きた出來事でしたから、ターキーは禮儀正しく落著いた言葉を用ゐ、ニッパーズは不機嫌な口調で返事をした譯です。すなは

ち、先程の表現を繰返すならば、ニッパーズの不機嫌が今は當番で、ターキーのそれは非番だつたといふ譯です。）

「ジンジャー・ナット」と、どんなにちつぽけな贊成票でも味方に加へたくて、私は云ひました。「君ならば、どう思ふ？」

「ちよつといかれてると思ひます」と、ジンジャー・ナットがにやつきながら答へました。

「みんなが云つた事、聞えただらう？」と、私は衝立の方を向いて云ひました。「そこから出て來て、君の職責を果し給へ」。

けれども、彼は返事をしてくれません。私はほとほと困惑して、一瞬、考へ込んで仕舞ひました。しかし、またもや仕事に急かされて、この窮境について考へるのはいづれ時間の餘裕のある時まで先延ばしにする事にしようと心を定め、多少の支障はありましたが、吾々はバートルビー抜きで書類の點檢をやり遂げました。尤も、一二頁毎にターキーが丁重な口調で、こんな遣り方は異常だとの意見を洩らし、ニッパーズはと云へば、消化不良から來る神經過敏の症狀でせう、椅子の上で身體を痙攣させてゐましたが、時折、食ひしばつた齒の隙間からシュウシュウ音を立てながら、衝立の背後の頑なな唐變木に向つて惡罵を浴びせかけてゐました。

ニッパーズにしてみれば、報酬も貰はずに他人の仕事をするなどといふ事は、これが最初で最後でした。

その間、バートルビーは自らの隱れ處(が)に坐り込んで、ひたすら自分だけの仕事に沒頭してゐたのです。

數日が過ぎ、彼は時間のかかる別の仕事に取組んでゐました。先だつての尋常ならざる振舞ひを目にしてゐたものですから、私は彼の態度をつぶさに觀察するやうになつてゐましたが、さうして見ると、彼は食事に出掛ける事が決してない。それどころか、どこにも出掛ける事が無かつたのです。私の知る限り、それまでのところ、彼は事務所から一度も外に出た事がありません。事務所の片隅で不斷の見張り番をしてゐるのです。それでも、午前中、十一時頃、ジンジャー・ナットがバートルビーの衝立の出入口に向つて、あたかも私の席からは見えない合圖で密かに招き寄せられるやうに近づいて行くのに、私は氣づきました。その後、少年は小錢をじやらつかせながら事務所を出、一攫(つか)みのジンジャー・ナッツを手に戻つて來て、それを例の隱れ處に屆け、駄賃に菓子を二つ受取るのでした。

してみると、奴(やつこ)さん、ジンジャー・ナッツを食つて生きてゐる譯だと私は思ひました。正確

に云ふならば、いはゆる食事らしい食事は決して摂らない。では、きつと菜食主義者なのだらう。いや、違ふ。彼は野菜すら決して食べない。ジンジャー・ナッツ以外には何も食べないのだから。しかし、ジンジャー・ナッツばかり食べて生きてゐたら、人體にどんな影響が齎されるのだらうか、私の思ひはそんな具合に妙な方向にどんどん進んで行きました。ジンジャー・ナッツといふ名前の由來は、ジンジャー（生姜）を獨特の成分の一つとして、そしてまた味付けの決め手として含んでゐるからだ。處で、ジンジャーとはそもいかなるものであるか。辛くてぴりりとするものだ。バートルビーは辛くてぴりりとしてゐるか。斷乎として、否。してみれば、ジンジャーはバートルビーに何ら效目がなかつたといふ事になる。恐らく、その事が彼の御氣に召したのだらう。

およそ消極的抵抗ほど、眞面目な人間を苛立たせるものはありません。抵抗を受ける側の人間が薄情ならざる氣質の持主で、抵抗する側がその消極性に於て完全に無害であるならば、その場合、前者は機嫌が好い時であれば寛大な心で努力して、自らの判斷力をもつてしてはどうしても打開不可能としか思へぬ難題であつても、想像力を賴りに何とか解決の緒を見出さうと努めるものです。正にそんな風な目で、大抵の場合、私はバートルビーとその振舞を眺めてゐ

ました。可哀想な奴！　私はさう思つた。惡意がある譯ぢやない。無禮（ぶれい）を働く氣なんぞない事は明らかだ。已むに已まれぬ思ひゆゑの奇行だといふ事は、顏にはつきり書いてある。俺にとつて役に立つ男でもある。何とか一緒にやつて行ける筈だ。今、追ひ出すやうな眞似をしたら、もつときつい雇ひ主の手に落ちて、手荒く扱はれた擧句の果に、慘めに飢ゑ死にでもするやうな羽目に追ひやられるだらう。さうだ。この際、俺は安い代償を支拂ふだけで、自讚といふ甘美な心の滿足を手に入れる事が出來る。バートルビーを助けてやり、あの妙に依怙地（いこぢ）な態度に調子を合はせてやつたところで、こちらの懷（ふところ）が痛む譯では殆ど、もしくは全く無いし、その一方、とどの詰りは俺の良心にとつての甘美な糧（かて）となるものを、自分の魂の中に蓄へて置く事にもなるではないか。とは云へ、私はいつもかういふ氣分でゐられた譯ではありません。バートルビーの消極性が時に私を苛立たせたからです。よし、これまでの態度を改めて彼に眞つ向から立向ひ――俺の憤懣に劣らぬ怒りの火花を彼が發するやうに仕向けてやる、そんな妙な衝動に私は驅り立てられたのです。でも、そんな事をやるくらゐなら、ウィンザー石鹼（香料入りの通例褐色または白色の化粧石鹼）に拳をぶつけて、火花を散らさせようとする方がまだしもでした。處が、ある日の午後、邪（よこし）まな衝動が私の心を制するに至り、その結果、以下のやうなちよつとした悶著が生じ

ました。

「バートルビー」、と私が云ひました。「それらの書類を寫し終へたら、一緒に照合したいんだがね」。

「その氣になれません」。

「何だつて？　まさか、またもやあの氣紛(きまぐ)れな態度を强情に押し通す積りぢやないだらうね？」

返事はない。

私は傍らのアコーディオン・カーテンを開け放ち、ターキーとニッパーズに顏を向けると、大聲でかう云ひました。

「バートルビーがまたしても書類の照合をやりたくないさうだ。ターキー、君はこれをどう思ふ？」

念のため申上げて置きますが、これは午後の事でした。ターキーは眞鍮(しんちゅう)製のボイラーさながら、全身を火照(ほて)らせながら坐つてゐました。禿頭から湯氣が立ち昇り、兩の手は染みだらけの書類をまさぐつてゐる。

「どう思ふかですつて？」とターキーが吠えました。「あの衝立の後ろに行つて、奴をぶん撲つて、目のまはりに痣を作つてやりたいと思ふばかりです！」

さう云ひながら、ターキーは立上つて、ボクサーみたいな腕の構へをしたものです。しかも、言葉を實行に移さんものと、今にも驅け出しかけたので、私は迂闊にも食後のターキーの鬪爭心をかくも效果的に搔き立てて仕舞つた事に仰天して、慌てて彼を引き止めました。

「坐つてくれ、ターキー」と私は云ひました。「ニッパーズの意見を聞かうぢやないか。ニッパーズ、君はどう思ふ？　バートルビーを卽刻馘にしても、許されるんぢやないかね？」

「失禮ですが、それは所長が決められる事で。彼の振舞が極めて異常で、ターキーや僕に對していかにも不當だとは思ひます。しかし、これは一時的な氣紛れでしかないかも知れません」。

「おいおい」と私は叫びました。「妙に氣が變つたもんだね――隨分彼に優しいぢやないか」。

「ビールですよ」とターキーが叫びました。「ビールのせゐで優しいだけです――今日、ニッパーズと一緒に食事をしましたからね。所長、この私だつて、隨分優しいもんです。奴を撲りに行きませうか？」

「バートルビーの事かね。いかん、ターキー、今日は駄目だ」と私は答へました。「どうか、

その拳骨を納めてくれ」。

私はアコーディオン・カーテンを閉め、改めてバートルビーの方に歩み寄りました。わが運命へと自らを驅り立てる更なる衝動を身内に感じながら。もう一度反抗されてみたい、そんな燃えるやうな思ひにとらへられたのです。バートルビーが一度も外出した事が無いのを私は思ひ出しました。

「バートルビー」と私は云つた。「ジンジャー・ナットがゐないんだ。ひとつ走り、郵便局まで行つて來てくれないか（歩いて僅か三分の距離でした）。そして、私に何か屆いてゐないか、見て來てくれ」。

「その氣になれません」。

「やりたくないと云ふのか？」

「その氣になれない、といふ事です」。

私はよろめきながら自分の机に戻り、腰を下ろして、深い物思ひに沈みました。頑固な盲目的衝動が戻つて來ました。この痩せつぽちの文無しによつて――自分の雇ひ人によつて、自分が撥ね付けられるやうな屈辱的事態を惹き起す手立（てだて）が、他に何か無いものだらうか。申し分な

く理にかなつてゐて、それでゐて奴が必ず拒絶するやうな何かが、他にあるだらうか。
「バートルビー！」
返事はない。
「バートルビー」と、もつと大きな聲で私は呼びました。
やはり返事はありません。
「バートルビー」と、私は怒鳴(どな)りました。
魔法の呪文の掟に從つてあらはれる亡靈よろしく、この三度目の呼出しでやつと彼は隱れ處の入口に姿を現しました。
「隣りの部屋に行つて、ニッパーズに私の所に來るやうに云つてくれ」。
「その氣になれません」、彼は恭しげ(うやうや)にゆつくりさう云ふと、靜かに姿を消しました。
「結構だよ、バートルビー」と、今にも恐るべき報復を加へずには措かぬとでも云はんばかりの、非常な嚴しさを孕(はら)んだ、それでゐて冷靜沈著で物靜かな口調で私は云ひました。その時は、半ばそんな積りでゐたのです。けれども、結局、夕食の刻限も迫つて來たし、困惑と困憊(こんぱい)感に苛(さいな)まれながらも、その日のところは帽子を被つて家路に就くのが得策だと、私は判斷しま

した。

白狀致しませうか、この一件の結末がいかなるものとなつたかを。まづ、バートルビーなる名前の蒼白き若き代書人が私の事務所に机を構へ、通常の相場、すなはち、一フォリオ（百語）當り四セントといふ報酬で筆寫をする事になつたにも拘らず、自らのやつた仕事を點檢する義務からは常時免除され、その義務はターキーとニッパーズの二人に移讓される事になつたといふ次第。勿論、敏活な仕事ぶりで立ち勝る二人に敬意を表して、といふのが理由とされた事は申す迄もありません。更に、件（くだん）のバートルビーはいかなる類の些末この上ない用向きにも決して驅り出される事はなく、よしんばその種の用達（ようたし）を懇願されても、「その氣になれない」といふ事になるであらうと――詰り、にべもなく拒絶する事になるであらうと、それが事務所の一致した理解となつたのであります。

日が經（た）つにつれ、私はバートルビーの存在をかなり受け容れられるやうになりました。仕事にむらが無く、一切の遊びごとに手を出さず、いつも勤勉で（衝立の背後でお得意の夢想に耽る時は別ですが）、いかにも物靜かで、どんな時にも顏付を變へる事がない、さういふ彼でしたから、實に貴重な人物に加はつて貰つたものでした。何と云つても有難いのは、彼がいつもそ

こにゐた、といふ事です。朝には一番にゐたし、日中もずつとゐて、夜も最後までゐてくれた。彼の正直な爲人に、なぜか私は全幅の信頼を置いてゐました。私の最も貴重な書類も彼の手に委ねて置けば安全この上無しと思つてゐたのです。確かに、時折彼に對して、突然發作的に癇癪を起さざるを得ない事もあつた。ああいふ奇妙な性癖や特權や前代未聞の義務免除といつたものは、バートルビーにしてみれば私の事務所に居續けるための暗默の條件をなしてゐた譯ですが、それらを私がいつも忘れずにゐるなどといふのはたうてい出來る事ではありません。時に、差し迫つた仕事を早く片付けたいと急ぐ餘り、うつかりバートルビーを呼びつけて、今から書類を縛るから、赤紐の端つこの結び目を指で押へてゐてくれなどと、口早にぶつきら棒な口調で命じたりした事もありました。無論、衝立の背後からは、「その氣になれません」とのお決まりの返答が間違ひなく返つて來る。人たるものとしてのありふれた諸々の弱點を分ち持つ人間として、かくまでのつむじ曲り——かくまでの理不盡に對して、どうして聲を荒げないでゐられませうか。ところが、かうして拒絶される經驗を重ねる裡に、とどの詰り、私は迂闊な行動を段々やらなくなるといふ、そんな結果になつたのです。

ここで申上げて置かなければなりませんが、法曹關係の事務所の入る人の出入りの多い建物

に、自ら事務所を構へる大抵の人間の習慣に從ひ、私は事務所の入口の鍵を數本用意してをりました。一本は屋根裏部屋に居住する婦人が保管してをり、彼女は週に一度事務所の床を清掃し、毎日掃き掃除をしてくれるのでした。もう一本は便宜のためターキーに持たせ、三本目は私がポケットに入れて時折持ち歩いてゐましたが、四本目は誰が持つてゐるのか、私は知りませんでした。

ところで、或る日曜日の朝、偶々(たまたま)私はさる有名な牧師の說教を聽きにトリニティ教會に行つたのですが、早く著き過ぎたので、時間潰しに事務所までぶらぶら歩いてみる事にしました。幸ひ、鍵は持つてゐた。ところが、鍵を鍵穴に差込んだところ、內側から何かが差込まれてゐて、それにぶつかつて入らない。びつくりして、私は思はず大聲を立てました。すると、たまげた事に、內側から鍵がまはされ、ドアを半開きにして、痩せこけた顏を私の方に突き出しながら、亡靈の如きバートルビーが、シャツ姿で、しかもシャツ以外は見た事もない程ぼろぼろのだらしない恰好で姿を現し、申譯ありませんが、生憎(あいにく)取り込み中なものですから、中にお入り頂く氣になれないと、靜かな聲で云つたのです。しかる後、一言二言、短く附け加へて曰く、このブロックのまはりを二三度ぶらぶらして來て頂ければ、多分、用事も濟んでゐると思

ひます、と。

さて、バートルビーが日曜日の朝なんぞに私の事務所を占有し、しかも例の如く生氣に缺けた紳士然たる無頓著ぶりを示しつつ、それでゐて落ち著き拂つた確固たる態度で、全く思ひも懸けず出現したといふ事實は私に不思議な效果を及ぼして、ただちに私は自分の事務所の戸口からこそこそと退散し、云はれた通りに行動したのであります。とは云へ、この不可解な代書人の穩やかながらも厚かましい振舞に對して、種々の反撥の疼きを、無力感を伴なひつつも心に感じなかつた譯ではありません。けれども、あの驚嘆すべき穩やかさ、あれこそが私の怒りを鈍らせたのみならず、云はば私を去勢して仕舞つたのです。と云ひますのも、自らが雇つた人間に指圖され、自らの所有する事務所から退散を命じられて、おめおめと從ふやうでは、一種の宦官と謗られても仕方ありますまい。更にまた、日曜日の朝なんぞに、バートルビーがシャツ姿で、しかもそれ以外には裸同然の姿で、私の事務所で一體何をしてゐたのか、私は頗る不安でした。何か怪しからぬ事でも起つてゐるのでは？　いやいや、そんな事はあり得ない。バートルビーが悖德的な人間だなどとは、一瞬たりとも考へる事は出來ない。しかし、あんなところで一體何を？　書類の筆寫？　いやいや、それもまたあり得ない。如何に奇癖の持

主とは云へ、バートルビーは取分け禮儀を心得た人間だ。裸同然の恰好で机に向ふなどとは思ひも寄らぬ。それに、今日は日曜日だ。世俗の用件で安息日の禮儀作法を破るやうな眞似をする男ではない、どうしてもさう思はせるところがバートルビーにはある。

が、それにも拘らず、不安を拭(ぬぐ)ひ去る事は出來ませんでした。不安と好奇心とに驅られつつ、つひに私は事務所に戻つた。今度は抵抗なく鍵を差込み、ドアを開けて、中に入つた。バートルビーの姿が見えない。心配になつて私は中を見まはし、衝立の後ろを覗いてみましたが、彼が外に出てゐる事は明らかでした。室内をもつと念入りに調べてみると、どの位の期間かは分りませんが、バートルビーが私の事務所で食事と著替へをし、睡眠も取つてゐた事は明らかなやうに思はれました。それも、食器も鏡も寢臺も無しに。部屋の片隅に置かれた、がたの來た古いソファのクッションを敷いた座部に、痩せた身體が横になつてゐた痕跡がかすかに殘つてゐました。彼の机の下には毛布が一枚卷き込んで仕舞つてあり、空つぽの暖爐の火床(ひどこ)には靴墨の箱とブラシ。椅子の上には金盥(かなだらひ)と石鹸とぼろタオル。ジンジャー・ナッツの屑が少々とチーズがひとかけら、新聞紙に包んでありました。さうだ、間違ひない、と私は思つた。バートルビーはここをねぐらにして、たつた一人で獨身生活を送つてゐるのだ。何と慘憺たる

孤獨と寂寥とが、まざまざとさらけ出されてゐる事か！　忽ち、さういふ思ひが私の胸に一氣にこみ上げて來ました。貧しさも竝ではないが、その孤絶の有樣たるや、何とも凄まじい！　考へても御覽なさい。日曜日ともなると、ウォール街はかの廢墟の都ペトラ（ヨルダン南西部の古都。石灰岩の建築遺跡が多い）の如く荒涼たるものですし、日曜日以外でも、夜になればいつも人氣が全く跡絶えて仕舞ふ。事務所のあるこの建物にしても、週日には働く人々の活氣で喧騷を極めますが、夜ともなれば、全き靜寂の巷となり、日曜日には、終日、侘しさの限り。そして、この場所をバートルビーは自らの住處としてゐるのです。以前は彼の目に大勢の人々で賑はふ樣子が映つてゐたのに、今はいかにも侘しくなつて仕舞つた有樣をたつた獨りで見詰めてゐる——あたかも、運命の轉變に翻弄される潔白の將軍マリウス（古代ローマの將軍、執政官。前一五五？～八六）が、カルタゴの廢墟の只中で獨り思ひに耽るかの如くに！

生れて初めて、鋭い痛みを覺えるほどの憂愁に、抗ふ術もなく私は捉へられました。それ以前は、不快といふ譯でもない物悲しさの感慨くらゐしか、私は經驗した事がなかつた。今や、人たるものとしての共通の絆ゆゑに、逆らふ術もなく、私は陰鬱な思ひに引き摺り込まれて仕舞つたのです。同胞なるがゆゑの憂愁！　何しろ、私もバートルビーも共にアダムの末裔なの

ですから。その日、ブロードウェイを、かのミシシッピ河の如き人波の大河を、華やかなとりどりの絹の衣裳や艶々(つやつや)した顔の群が、いとも晴れやかに著飾つた白鳥よろしく滑るやうに進んで行つた有様を、その時、私は思ひ出しました。そして私はその光景を蒼白の代書人と比較して、心にかう思つたのです。ああ、幸福は光を慕(した)ふものだから、世界は明るいものと吾々は思ひ込む、だが、不幸は獨り離れて身を隱すものだから、不幸など存在しないと吾々は思ひ込むのだ。これらの物悲しい想念——もとより、病んだ愚かな頭腦の生み出した奇怪な幻想でしかありませんが——に引き續いて、バートルビーの奇癖に纏(まつ)はる、もつと別の、より特異な考へに私は導かれて行つたのです。異様な發見の豫感(よかん)が私につきまとつて離れませんでした。代書人の蒼褪めた姿が、無關心な群集に取り圍まれて、身に纏(まと)ふ屍衣(しい)を震はせつつ、出棺を待つ光景が私の目に映りました。

突然、私は、鍵穴に鍵が差込んだ儘になつて見えてゐる、バートルビーの閉ざされた抽斗(ひきだし)に注意を惹き付けられました。

別に惡氣がある譯ぢやなし、冷酷な氣持で好奇心を滿たさうといふのでもない、私は心にさう思つた。それに、机は私のものだし、中身だつてさうだ、一つ、中を覗かせて貰はうぢやな

いか。何もかもきちんと整頓されてゐて、書類も綺麗に收められてをりました。机の中の小仕切は底が深く、私は綴ぢ込み書類の束を傍に動かして、手で底を探つてみた。やがて、何かが手に觸れたので引つ張り出してみると、それは古びた括り染めの大きなハンカチで、重たく、結んで縛つてありました。解いてみると、貯金箱でした。

これ迄私の目に止まつた、バートルビーにまつはる諸々の密やかで謎めいた事柄の悉くを、私は思ひ起してみました。彼は返事のためでなければ決して口を開かず、時々は自分だけの時間が相當持てたのに、本を——新聞すら——手にする姿を一度も見せた事がなく、衝立の向うの薄暗い窓邊に長時間佇んで、窓の無い煉瓦の平壁を眺めてゐた。食堂や料理店に入つた事が全然無いのは確かだし、彼の蒼白い顔付からして、ターキーのやうにビールを飲んだり、他の人々のやうに紅茶や珈琲を飲んだ事もないのも明らかだつた。この俺の知る限り、取り立ててどこかに出掛けて行つたといふ事もなく、ひよつとすると今回が唯一の例外なのかもしれないが、散歩のため外出する事もなかつた。自分が何者なのかも、どこからやつて來たのかも、親類縁者がゐるのかどうかも、語つてくれなかつたし、あんなに痩せて顔色が惡いのに、身體の不調を訴へる事もなかつた。それに何より、彼は無意識裡に、蒼白なる——何と云はうか——

蒼白なる氣品、とでも云はうか、もしくは寧ろ嚴肅(げんしゅく)なる自己抑制とでも云へるやうな雰圍氣を身邊に漂はせてゐて、俺はそれにすつかり氣壓(けお)され、彼の奇癖にも大人しく從つて仕舞ひ、彼が長い間動かずにゐる樣子からして、きつと衝立の向うに佇んで、窓の無い壁に向ひながら物思ひに耽つてゐるのだらうと知りつつも、ほんの些末な用事を賴む事すら躊躇(ためら)ふやうになつて仕舞つた。

こんな事をあれこれと思ひめぐらし、彼が私の事務所をねぐらとして自分の家同然に使用してゐるといふ、今しがた發見したばかりの事實とそれらとを結びつけ、更には彼の病的な迄にふさぎ込んでゐる樣子をも思ひ合はせつつ、色々考へてゐる裡に、ある種の警戒的感情が私に忍び寄つて來ました。私の當初の感情は、純然たる憂愁と心底からの憐憫(れんびん)でした。が、バートルビーの孤絕の姿が私の想像力にどんどん强く訴へる樣になるにつれて、その同じ憂愁が恐怖に、憐憫が嫌惡に、次第に變つて行くやうになつたのです。不幸の有樣を見たり考へたりすると、ある一定の程度迄は、吾々の最良の感情が呼び起されるが、特殊な場合、その程度を超えると、さうではなくなるといふ事は、いかにも眞實だし、同時に、實に恐るべき事でもある。それはみな人の心の本質に內在する利己心のせゐだと主張する人々は間違つてゐる。それは寧

ろ、餘りにも深刻で根源的な疾患を治癒する事への或る種の絶望感に由來してゐるのです。感じ易い人間にとつては、憐憫は往々にして苦痛となる。そして、さういふ憐憫が實りある救濟に繋がり得ないといふ事がつひに明らかになつて來ると、憐憫と手を切れと、良識は心に命じるのです。その朝、私が目にしたものによつて、代書人は持つて生れた治癒する見込の無い病弊の犧牲者であると、私は確信するに至りました。彼の肉體に施しを與へる事は、或は私にも出來るかもしれない。しかし、彼の肉體が彼を苦しめてゐるのではない。苦しんでゐるのは彼の魂なのであり、彼の魂には私は手を觸れる事は出來ません。

その朝、トリニティ教會に行くといふ目的を私は果しませんでした。ああいふものを見て仕舞ふと、なぜか暫くは教會なんぞに通へなくなつて仕舞つたのです。バートルビーをどうしたらよいものかと思案しつつ、私は家路を辿りました。とどの詰り、私の心は決つた——翌朝になつたら、經歷等について彼に幾つか無難な質問をしてみて、もしも彼がはつきりと腹藏なく返事をするのを拒むやうなら（彼はその氣になれないだらうと私は思ひましたが）、その時には、彼に支拂ふべき給料分の金額に二十弗紙幣を加へて彼に與へ、もうこれ以上働いて貰ふ必要は無いと云つてやり、ただ、他のやり方で援助する事が出來るやうなら、喜んでさうする積りだ

し、郷里がどこであれ、そこに戻りたいといふのなら、旅費はこちらで持たせて貰はう、さう云つてやるのだ。更にまた、郷里に戻つた後、いつ何時でも援助が欲しいと思つたら、手紙を寄越せば必ず返事を出す事にしよう、とも。

翌朝です。

「バートルビー」と、衝立の向うの彼に向つて、私は優しく呼びかけました。

返事はない。

「バートルビー」と、更に優しい聲で私は呼びかけた。「こつちにおいで。君がその氣になれないやうな事を、何も賴む積りはない——ただ、君に話がしたいんだ」。

すると、彼は音も立てずに、すうつと姿を現しました。

「バートルビー、君が生れた處を敎へてくれないか？」

「その氣になれません」。

「君自身の事について、何でもいいから、話してくれないか？」

「その氣になれません」。

「しかし、一體どんな理由があつて、私と話をしたがらないのかね？　私は君の友達の積りだ

けれど」。

私が話してゐる間、彼は私の方を見ないで、キケロの胸像をじつと見詰めてゐました。その時、私は坐つてゐたので、それは私の眞後ろの、頭上六インチ程のところに掛つてゐたのです。

「バートルビー、返事は？」と、暫く待つた後、私は云ひました。その間、彼の表情は少しも變らず、ただ、血の氣の無い薄い唇がごくごく微かに震へただけでした。

「今は、返事をする氣になれません」、彼はさう云ふと、隱れ處に引つ込んで仕舞つた。

己れの弱さを認めなくてはなりませんが、その時の彼の態度に私は苛立を覺えざるを得ませんでした。彼の從容たる態度の中に、ある種の侮蔑が潛んでゐるやうに思へたのみならず、彼の偏窟ぶりは忘恩の所業としか思へなかつたからです。彼が私から受けた厚遇及び寬大な取り扱ひは、否定し難いものの筈ではありませんか。

またもや私は坐り込んで、自分がどうすべきか、思案に耽りました。彼の振舞には心を傷つけられたし、自分の机に戻つた時には、馘にしてやると心を決めてゐたのです。が、それにも拘らず、何やら迷信的な思ひが私の心の扉を叩き、私にさういふ決意の實行を禁じたのみならず、この世で最も孤獨なこの男に一言でも冷酷な言葉を口にしたら、お前は許し難い惡黨だと

私を非難するやうな、そんな妙な感情に私は捉へられたのです。とどの詰り、彼の衝立の後ろに親しげに自分の椅子を引き摺つて行つて、私は腰を下ろしてから云ひました。「バートルビー、それなら、君の過去の事は何も話してくれなくていい。けれども、友達としてお願ひしたい、この事務所の仕來りには、なるべく從ふやうにしてくれないか。約束してくれ。明日か明後日には、書類の點檢の手傳ひをしてくれると、詰り、一日二日經つたら、少しは分別のある振舞をするやうになつてくれると——さう約束してくれないか。賴む、バートルビー」。

「今は、少しは分別のある振舞をする氣になれません」、蒼褪めた顏で、彼は穩やかにさう答へました。

丁度その時、アコーディオン・ドアが開いて、ニッパーズが入つて來ました。普段よりひどい消化不良を患つたせゐで、前夜はいつになく眠れぬ夜を過したやうでしたが、今しがたのバートルビーの言葉を彼が小耳にはさみました。

「その氣になれない、だつて？」と、ニッパーズは齒をきしらせて云ふと——「所長、僕が貴方なら、その氣にならせてやりますがね」と、私に向つて云ひました——「僕だつたら、必ずその氣にならせてやる。この强情つぱりに、やりたい氣にならせてみせます。一體、今度は、

何をする氣になれないつて云ふんです?」

バートルビーは身動ぎ一つしない。

「ニッパーズ君」と、私は云ひました。「今はちよつと、彼と二人だけで話をしたい、そんな氣になつてゐるんだがね」。

最近、なぜか私は、「その氣になる」といふ言葉を、必ずしもそんなに適切でない場合にも、我知らずやたらに遣ふ癖がついてゐました。そして、この代書人との接觸が、既に私の精神に深刻な影響を與へてゐた事を思ひ、慄然とした次第です。この先、更に、より深刻な變調が生じないとは限らないではありませんか。私が思ひ切つた措置を決斷したのは、かかる懸念のしからしむるところでなかつたとは云へません。

ひどくむつつりした、不機嫌そのものの顔をしてニッパーズが出て行くと、ターキーがいかにも愛想よく、うやうやしげな態度で入つて來ました。

「失禮ですが、所長」と彼。「昨日、私はこのバートルビーの事を考へてをりましてな、奴さん、毎日一クォートの上等なビールを飲む氣になりさへすれば、症狀も改善して、書類の點檢の手傳ひも出來るやうになるのではあるまいかと、そんな風に思ひまして」。

「やつぱり、君にもその言葉が感染(うつ)つたね」と、少しく興奮して私が云ひました。
「失禮ですが、何の言葉で？」と云ひながら、ターキーが衝立の後ろの狹苦しい場所にいかにも恐縮さうに身體を押し込んで來たので、勢ひ私がバートルビーを押し退(の)ける形になつて仕舞ひました。「何の言葉の事です、所長？」
「獨りにして置いて欲しい、私はそんな氣になつてゐるのですが」と、獨りだけの場所に押入られて、氣分を害したかのやうにバートルビーが云ひました。
「それだよ、ターキー」と私が云ひました。「それ、今の言葉」。
「ああ、その氣になる、ですか？　なるほど――妙な言葉ですな。私は決して遣ひませんが。ですが、所長、ただ今申上げましたやうに、もしも彼がその氣になつてくれさへすれば――」。
「ターキー」と、私は遮(さへぎ)つて云ひました。「どうか二人だけにさせてくれ給へ」。
「勿論ですとも、所長がその氣になつておいでなら」。
　彼が退出しようとアコーディオン・ドアを開けると、机に向つてゐたニッパーズが私の姿を捉へて、或る書類を筆寫するのに、所長なら青い紙と白い紙とどちらを選ぶ氣になりますかと訊ねました。その氣になるといふ言葉を彼が巫山戯(ふざけ)て遣つてゐるやうな響(ひびき)は微塵(みぢん)もない。それ

が彼の舌から自然に轉(ころ)がり出た事は明らかでした。私は心に思つた。私や所員達の頭腦と迄は云はずとも、舌を或る程度をかしくして仕舞つたこの狂人を、どうしても追ひ出さなくてはならない。しかし、即刻解雇の話を持ち出すのは得策ではないと、私は考へました。

翌日、バートルビーが例の窓の無い壁に向つて、窓邊で思ひに耽りつつ佇んでゐる以外、何もしてゐないのに私は氣付きました。どうして書き寫す仕事をしないのかと訊ねると、もうそれは止める事に決めたと彼は答へました。

「何だつて？　どうしてまた？　今度は何なんだ？」と私は叫んだ。「もう書き寫すのは止めた？」

「もう止めました」。

「理由は？」

「自分でお分かりになりませんか？」と、冷ややかな返事。

私は彼をまじまじと見詰め、彼の兩の眼がどんよりと曇つてゐるのに氣付きました。すぐに私の胸にこんな思ひが浮かびました。私のところに來てからといふもの、數週間に亙つて、あの薄暗い窓邊で書類を書き寫す仕事に闇雲(やみくも)に打ち込んだために、一時的に視力が損(そこな)はれて仕舞

つたのかもしれない。

私は心を動かされ、彼を慰め勞(いたは)る言葉を口にしました。暫く書く仕事を休んでくれて、一向に構はない、といふやうな事をそれとなく云ひ、この機會に戸外で身體のためになる運動をぜひやつたら好い、と勸(すす)めてみました。しかし、彼はやらうとはしなかつた。それから二三日して、他の雇ひ人達が事務所を空けてゐた時に、手紙を何通か大至急送らなければならなくなつた事がありました。いくらバートルビーでも、他に何一つやる事がないのだから、いつもよりは軟化して、きつと郵便局に手紙を持つて行つてくれるだらう、さう私は考へた。ところが、彼はにべもなく斷りました。かくして、甚だ弱りましたが、私は自分で出掛けざるを得ませんでした。

更に何日かが過ぎました。バートルビーの眼が良くなつたのかどうかは何とも云へませんでした。傍目(はため)には良くなつてゐるやうにも思へましたが、良くなつたのかと訊いてみても、一切答へてくれません。いづれにせよ、筆寫の仕事は全くしようとしない。その件で私が執拗(しつよう)に迫ると、たうとう彼は、今後一切筆寫はやめる事にしたと宣言する始末。

「何だつて？」と私は叫びました。「眼がすつかり良くなつて——前よりもつと良くなつても

――それでもやらないといふのか？」

「筆寫はやめる事にしたのです」、彼はさう答へて、靜かに離れて行きました。

彼は以前同樣、事務所に居坐つた儘でした。いやいや――信じ難い事ですが――以前以上にしつかりと根をおろして仕舞つたのです。はてさて、どうしたらよいものか？　事務所にゐても何もしようとしない。一體どうしてここにゐるんだ？　はつきり云つて、今や彼は私にとつて石臼の如き存在でありました。首飾りとして使へないだけでなく、擔ぐにはあんまり重過ぎる。けれども、私は彼を可哀想に思つてゐました。彼ゆゑに自分が落著かない氣持になつてゐるのは、偏へに彼によかれとばかり思ふからだと私が云へば、それは全き眞實とは云ひ難い。彼が一人でも親戚か友人の名前を擧げてくれさへしたら、私は立ちどころに手紙を書き送つて、この哀れな男をどこか手頃な隱れ處に連れ去つてくれるやう强く促した事でせう。しかし、彼は全く獨りぼつち、天涯孤獨の身の上のやうでした。云はば、大西洋のど眞ん中に漂ふちつぽけな破船の如きもの。が、たうとう、私は仕事上の諸々の必要ゆゑに、他の事柄は一切考慮の外に置かざるを得ない狀況に立ち至りました。私はバートルビーに出來るだけ優しい口調で、六日以內に無條件で事務所を立去るやう申し渡し、それ迄の間にどこか他の住ひを

確保すべく手を盡(つく)すやう忠告した上で、退去のための第一歩を君自身が踏み出してくれさへしたら、住ひを探す手助けをしてやつてもよい、とも云つてやりました。「それに、バートルビー、君がいよいよ出て行く時には」と私は附け加へて云ひました。「全く手ぶらで出て行くやうな事にはさせないよ。今から六日以内だ。分つたね」。

約束の期限が切れた時、私は衝立の後ろを覗いてみました。すると、何と、そこにはバートルビーが！

私は上衣のボタンをかけて氣持を落著けると、ゆつくりと彼に歩み寄り、肩に觸れて云ひました。「約束だ。出て行つてくれ給へ。氣の毒だとは思ふ。さあ、このお金を受取つてくれ。とにかく出て行つて貰はないと」。

「その氣になれません」と、私に背中を向けた儘、彼が答へました。

「ならなくちやならないんだ」。

彼は默つた儘でした。

ところで、私はこの男の常日頃の廉潔ぶりに限りない信頼を寄せてをりました。私は取るに足らぬ事柄には甚だ無頓著な男で、六ペンス銀貨や一シリング銀貨をうつかり床に落したりす

る事があるのですが、さういふ場合、彼はよくそれらを拾つて屆けてくれたものです。ですから、私が以下に記すやうな措置を採つたとしても、常軌を逸したものとは思はれますまい。

「バートルビー」、と私は云ひました、「君には十二弗、手當を支拂はなくてはならない。ここに三十二弗ある。二十弗は餞別の積りだ——受取つて貰へるね？」、さう云つて私は紙幣を彼に差出しました。

彼は何の反應も示しません。

「それぢや、ここに置いて置かう」、さう云つて、机の上にあつた文鎮の下に私は紙幣を挾み込み、それから帽子とステッキを取り、戸口に向ひながら、靜かに振り返つて、かう附け加へました——「バートルビー、事務所から持物を運び出したら、勿論、鍵はかけて置いてくれ給へ——今日は君以外、みんな歸つて仕舞つたんだからね——そして、鍵は戸口のマットの下に入れて置いてくれないか。明日の朝、私が使へるやうにね。もう會ふ事も無いだらう。これで君ともお別れだ。今後、新しい住ひに落著いてから、私に何か役に立てる事があつたら、必ず手紙で知らせてくれ。左様なら、バートルビー、元氣で暮らせよ」。

しかし、彼は一言も返事をしませんでした。どこぞの寺院の廢墟に最後に殘つた一本の柱さ

ながら、他には人氣の全く無い部屋の眞ん中に、押し默つた儘、獨り立ち盡してゐたのです。

物思ひに沈みつつ家路を辿つてゐる裡に、私の虚榮心が憐憫の情を壓倒するに至りました。バートルビーを厄介拂ひした己れの絶妙な手際の良さに、吾ながら得意な氣持にならざるを得なかつたのです。絶妙な手際と私は申す譯ですが、冷靜に物事を考へる方ならば、誰もがさう思つて下さるに違ひない。何ゆゑ見事かと云へば、まこと完璧な平穩裡に事が運ばれたといふ點に、それは見出せるやうに思はれます。粗暴に脅しつけたり、虚勢を張つたり、腹立ちまぎれに怒鳴り散らしたり、そのけちな荷物をまとめてとつと出て行けと怒鳴りながら部屋の中をどかどかと騷々しく行き來したり、そんな類の事は一切なかつた。本當です。私はバートルビーに大聲で出て行けなどとは云はず――もつと目端の利かない人なら、さうしたかもしれませんが――彼はどうしても退去しなければならないといふ事を前提に据ゑ、その前提に基いて、私が主張しなければならない事の一切を組み立てたのです。自分の採つた措置について考へれば考へるほど、私は益々それに魅せられるに至りました。が、それにも拘らず、翌朝、目覺めるや否や、疑念が湧いて來ました――寢てゐる裡になぜか虚榮心が蒸氣のやうに消え失せて仕舞つたのです。人が最も冷靜かつ賢明になる時刻、その一つが、朝、目覺めた直後であり

ます。私の採つた措置は、依然賢明なものに思へた。しかし、それは理窟の上での事でしかない。實際にやつてみてどういふ結果を齎すか、そこが問題だ。バートルビーの退去を前提に据ゑるといふのは實に見事な發想でした。しかし、とどの詰り、それは飽く迄も私の立てた前提でしかなく、バートルビーの全く與り知らぬ事でしかない。肝腎なのは、彼が退去するであらうといふ前提を私が立てたかどうかではなく、彼がさうする氣になるかどうか、であります。彼は論の前提なんぞといふものよりも、好みの氣分によつて動く男なのですから。

朝食後、私は事の成否について自問自答しながら、街に歩いて行きました。結局は慘めな失敗に終つて、いつものやうにバートルビーは私の事務所で暮してゐるのが分るだらう、と思つたかと思ふと、彼の椅子にはきつと誰も坐つてゐないに違ひないと思へたりもして、私の心はめまぐるしく變化し續けました。と、ブロードウェイとキャナル・ストリートの角で、ひどく興奮した人々が熱心に話をしてゐます。

「失敗する方に俺は賭ける」、通りすがりにそんな聲が聞えました。

「失敗する方に、だつて？——よし、賭けた」と私は口走つた。「あんたも金を出し給へ」。

反射的に手をポケットに突込んで、自分の賭金を取り出さうとした時、今日は選擧の投票日

だといふ事を私は思ひ出しました。耳に聞えた言葉はバートルビーとは何の關係もなく、市長選擧の候補者の當落の事を云つてゐたのです。自分の考へ事に沒頭してゐた餘り、云はば私は、ブロードウェイ全體が私と興奮を共にして、私と一緒に同一の問題を議論してゐると錯覺して仕舞つたといふ譯です。街頭の喧騒が私の一時的な放心狀態を隱蔽してくれた事につくづく感謝しつつ、私は歩を進めました。

豫め意圖してゐた通り、いつもの時刻より早めに事務所の戸口に到著した私は、しばし耳を傾けながら佇んでゐました。物音ひとつしません。彼は出て行つたに違ひない。ドアのノブを回してみました。鍵がかかつてゐる。やつぱり作戰が見事成功したのだ。彼奴、本當にゐなくなつたみたいだ。けれども、或る種の哀感も私の感情の中には混つてゐて、己れの目覺ましい成功を私は殆ど悔やんでさへゐたのです。バートルビーが殘して行つてくれた筈の鍵を求めて、ドアマットの下をさぐつてゐると、私の膝が偶然壁の羽目板にぶつかつて、ノックするやうな音を立てました。すると、それに應じて內側から聲が――「ちよつと待つて下さい。今、手が放せません」。

バートルビーでした。

びつくり仰天。隨分昔、ヴァージニアで、或る晴れた日の午後、夏の雷に打たれてパイプを銜へた儘死んだ男のやうに、一瞬、私は立ち盡しました。その男、自宅の開け放たれた暖かい窓邊で死んだのですが、夢見るやうな安らかな午後の間中、窓から身を乘り出すやうな恰好の儘でゐて、誰かに觸られて初めて下に倒れ込んだのださうです。

「まだゐるんだ！」、やうやく私は呟きました。しかし、この謎めいた代書人が私に揮つてゐる奇怪な支配力、私がどんなに苛立つても完全には逃れられない支配力に、再び私は屈服して、のろのろと玄關の階段を降り、通りに出、街を一ブロック歩きまはりながら、この前代未聞の難局に當つて次に採るべき方策を考へました。力づくで叩き出す事など、私には出來ない。罵倒して追ひ出さうとしても、うまくは行くまい。警察を呼ぶのは不愉快だ。さりとて、死人さながらのあの男に、いつまでも甘んじて屈服し續ける——これもまた、たうてい考へ難い事だ。どうしたらいい？　或は、どうしやうも無いとして、この件に關して私が考へ得る更なる前提はあるだらうか？　さうだ、前に私は、バートルビーがいづれ出て行くだらうといふ、將來の行爲に基く前提を立ててみた譯だが、今度は、バートルビーは既に出て行つたといふ、既往の行爲に基く前提を立ててみる事が出來るかもしれない。この前提を論理的に實地に

適用すれば、私は急いで事務所に入つて行き、バートルビーの姿なんぞまるで見えない振りをして、彼が空氣でしかないかのやうにまともに彼にぶち當(あた)る、といふ事になる。こんな遣り方をすれば、いかにも見事な急所の一突き、といつた觀を呈するに相違ない。前提に基く方策をかくも見事に適用されては、さすがのバートルビーにも抵抗は叶ふまい。しかし、一旦はさう考へてみたものの、考へ直してみると、この計畫は何だか成功しさうもないやうに思はれて來ました。私はもう一度彼と話し合はうと決心しました。

私は事務所に入つて行き、穩やかな中にも嚴しさを示す表情をして、「バートルビー」と云ひました、「私はどうにも嫌な心持だ。苦痛だよ、バートルビー。君にはがつかりだ。君は立派に紳士の素養を具へてゐると思つてゐたから、どんなに面倒な立場にゐるにしても、こちらがちよつとしたヒントを示せば、それで十分埒(らち)が明くだらうと——詰り、さういふ前提で物を考へてゐた譯だ。けれども、どうも私は間違つてゐたらしい。おや、何だい、これは」、と私は心底びつくりして、前日の晩に置いたところにその儘置かれてゐる紙幣を指差しながら、云ひました。「君はまだこれに手を觸れてさへゐないのか」。

答へはありません。

「君は出て行くのか、行かないのか？」私は突如激情に驅られて、彼に詰め寄りながら、さう云つて返答を迫りました。

「出て行く氣になれません」と、「なれません」をさりげなく强調しながら、彼は答へました。

「君にここにゐる權利があるのか？　家賃を拂つてゐるのか？　私の稅金を拂つてくれてゐるのか？　この事務所は君のものか？」

答へはなし。

「それぢや、もう筆寫の仕事が始められるやうになつたのか？　眼は治つたのか？　今朝はちよつとした書類を書き寫してくれるか？　少しは點檢の手傳ひをしてくれるか？　郵便局まで用達に行つてくれるか？　要するにだ、どうしても出て行かないといふのなら、それに多少は色をつけるやうな振舞をしてくれるのか？」

彼は默つて隱れ處に引退りました。

今や私はひどく腹を立ててゐたし、神經も昂ぶつてゐたので、これ以上感情を露はにするのは差當り抑制した方が無難だと考へました。この時、部屋にはバートルビーと私しかゐませんでした。私は例の不運なアダムズと、更に不運なコルトとの間に起きた悲劇的事件（一八四二年、ニューヨーク市で

起きた殺人事件）の事を思ひ出したのです。コルトの部屋に二人だけでゐた時、哀れなコルトがアダムズに散々腹を立てさせられて、無分別にも興奮の狂亂に我が身を委ね、取返しのつかない行爲へと——誰よりも深く本人が悔やむしかない行爲へと——我知らず急いで仕舞つたのでした。その事件の事を思ふ度に、もしも二人の諍ひが街頭で、或は個人の住居で起つたならば、そんな結末には至らなかつたらうと、よく私は思つたものです。人間らしい家庭的な溫もりをおよそ感じさせない建物の中の、人氣のない階上の事務所に二人切りでゐて——勿論、絨緞も敷いてない、埃つぽく、見た目もすさんだ感じの事務所でしたらう——正にそんな狀況こそが、不運なコルトの憤懣と絶望とを一層强めるのに大いに役立つたに相違ありません。

けれども、腹を立てるといふ、アダム以來のこの罪深い感情が私の胸中に湧き起り、バートルビーをめぐつて私を試みようとした時、私はそいつと搏鬪して投げ飛ばしてやつたのです。どのやうにして？　何、頗る簡單、私はただ神のかの命令を思ひ起したのです。「われ新しき誡命を汝らに與ふ、なんじら相愛すべし」（新約聖書「ヨハネ傳」第十三章第三十四節）。左樣、これこそが私を救つてくれたのでした。諸々のより高尙な考察はひとまづ措くとして、隣人への愛といふものは、屢々、甚だ賢明にして思慮に富む原理として作用するものであり——それを有する者の身を守る重要な

手段となり得るのです。人間はこれまで嫉妬ゆゑに、憤怒ゆゑに、憎悪ゆゑに、我欲ゆゑに、自尊心ゆゑに、殺人を犯して來た。しかるに、隣人への愛といふ優しい感情ゆゑに、凶悪な殺人を犯した人間の事など、私は一人として聞いた事がありません。してみると、他によりよき動機が見出せず、單に自己利益のためといふ事でしかなくても、人たるものは全て、取分け激し易い人ならばなほの事、隣人愛や博愛の精神に心を向けさせられるべきなのです。いづれにせよ、この際、私は代書人の行爲を善意に解釈する事によつて、彼への腹立ちを鎮めようと懸命に努めました。哀れな奴、何と哀れな奴だ！　さう私は考へた。何の悪氣がある譯でもない、それに、とても辛い目に遭つて來たのだ、大目に見てやらねば。

更に又、私はすぐに仕事に打ち込んで、その傍ら、落ち込む氣分を和らげようと努めました。例へばこんな想像をして――バートルビーだつて午前中の裡には氣分のよい時などもあらうから、そんな時には自から進んで隱れ處を後にする氣になつて、確固たる足取りで戸口に向つて行つてくれるだらう、などといつた具合に。けれども、そんな事は起らなかつた。十二時半になると、ターキーは顔を赤々と輝かしてインク壺をひつくり返し、何かにつけて騒々しい態度を示し始め、ニッパーズは勢ひが衰へて穩やかで禮儀正しくなり、ジンジャーナットはお

晝の林檎を嚙つてゐました。そして、バートルビーはと云へば、相變らず窓邊に佇み、窓の無い壁に向つて深遠この上なしの瞑想に耽つてゐたのです。一體、あれが信じられるか？　あれに俺は責任を負はなくちやならないのか？　その日の午後、私はそれ以上彼には何も口を利かずに事務所を去りました。

數日が過ぎ、その間、私は暇を見ては、「エドワーズ（ジョナサン・エドワーズ。米國最大のカルヴィニスト、神學者・哲學者。「大覺醒」と稱せられる信仰復興運動の指導者。一七〇三～五八）の意志論（「自由意志論」の主著）」や「プリーストリー（ジョゼフ・プリーストリー。英國の神學者。一七三三～一八〇四）の必然論（「哲學的必然の教義」の著書）」を少しばかり覗いてみたのですが、狀況が狀況でしたから、これらの書物は私の感情に好ましい作用を及ぼしてくれました。代書人にまつはる私の諸々の災難は、全てこれ、永劫の昔から神意によつて豫め定められてゐたのであり、バートルビーは全知の神の神祕的な目的のために、すなはち、死すべき存在でしかない私の如きが測り知り得ようもない目的のために私に割り當てられたのだと、そんな風に次第に私は確信するやうになつたのです。さうだとも、バートルビーよ、衝立の後ろにゐるがいい、私は心にさう思つた。もう君を責め立てるやうな事はすまい。君はここいらの古い椅子みたいなもので、害もなければうるさく音を立てる事もないのだから。要するに、君がここにゐると分つてゐる時ほど、俺にとつて、自分が個人に返つた

と感じられる時は無いのだ。やうやく分つた。心に感じた。俺は我が生涯の豫め定められた目的を理解した。俺は滿足だ。世間にはより高尚な役割を演ずる他人もゐよう。けれども、この世に於ける俺の使命は、バートルビーよ、君がゐたいと思ふ間だけ、事務所の部屋を君に提供する事なんだ。

もしも事務所を訪れる我が同業者の連中が、お節介で薄情な言葉を私に浴びせかけるやうな事がなかつたならば、右に述べた如き賢明にして幸ひなる精神狀態は、必ずや維持されてゐた事でせう。けれども、屢々見受けられる事ですが、狹量な連中と絕えず軋轢を起してゐると、その裡に寬大な人々の最良の決意すら磨耗して、やがては消滅して仕舞ふものです。尤も、確かに、よくよく考へてみれば、私の事務所を訪れた人々が不可解なるバートルビーの異樣な姿に强い印象を受け、彼について何か意地の惡い言葉を投げつけたい氣持になつたとしても怪しむには足りません。仕事上の附合のある辯護士が時折私の事務所を訪れて、バートルビーしかゐないのを知ると、私の居場所について彼から正確な情報を訊ね出さうとする事がありましたが、バートルビーは相手の詰らぬ話には耳を藉さうともせず、部屋の眞ん中にじつと立ち盡した儘でゐるのです。かくて、バートルビーのそんな姿をしばらく眺めた後、何の情報も得られ

ぬ儘、辯護士は退散する事になつて仕舞ふ。

また、爭議の案件を仲裁人に委託する仲裁委員會が開かれて、事務所の部屋が法律家や證人で一杯となり、議事が頗る迅速に進行してゐる時、一心不亂に仕事に取り組んでゐた法律家がバートルビーの手が空いてゐるのを見て、一つ走り自分の事務所まで行つて書類を取つて來てくれないかと賴むやうな事もありました。すると、バートルビーは穩やかに斷るのですが、それでゐて相變らず手持ち無沙汰にしてゐる。法律家は目をまん丸にしてまじまじと見詰めてから、私の方に向き直る。私に何が云へたでせうか？　たうとう同業者の間で、私が事務所に置いてゐる妙な男について怪訝（けげん）に思ふ聲が囁（ささや）かれ、それが廣がりつつある事に私は氣づかされるに至りました。これには大いに困惑させられた次第です。こんな考へが私の心に浮かびました。ひよつとしたら、この男、意外に長生きして、俺の事務所を占據し續け、俺の權威を否定し、訪問客を當惑させ、俺の職業上の評判を貶（おとし）め、事務所全體に暗い影を落し、貯へた金で最後まで心身を保ち（何せ、どう見ても一日に五セントしか遣はないのだから）、つひには多分俺よりも長生きして、永年居住を理由に事務所の所有權を主張するなんて事になるのではあるまいか。そんな陰鬱な豫感が次々と私を襲ひ、友人達が私の事務所の亡靈について容赦ない言葉を

ひつきりなしに浴びせかけるやうになつて、ある大いなる變化が私の胸中に生じました。私は持てる力を總動員して、この耐へ難い惡夢の如き重荷と金輪際(こんりんざい)縁を切らうと心を決めたのです。

しかし、この目的に叶ふやうな手の込んだ計畫について思案を運(めぐ)らす前に、まづは私はバートルビーに、事務所から退去して二度と戻つて來ないといふ事が如何に妥當かについて、單刀直入に話してみました。君としても、どうか愼重にじつくりと考へみて欲しいと、落著いた眞劍な口調で私は彼に賴んだのです。けれども、彼は熟考に三日を費した後、自分の當初の決意は變らないと、すなはち、依然私から離れる氣になれないと通告して來ました。

俺はどうしたらいい？　上衣のボタンを一番上まで締めながら、私は自分に問ひかけました。どうしたらいい？　どうすべきなのか？　この男、といふより、寧ろこの亡靈に對して、俺はどうすべきだと良心は云ふのか？　彼と縁を切る事、これはどうしてもやらねばならぬ。奴には出て行つて貰はなければ。しかし、どのやうにして？　叩き出す、なんて事はやれまい、あの哀れな蒼白い無抵抗な人間を――あんな無力な人間を戸口から叩き出すなんて事はやれまい？　そんな殘酷な事をして、己れを辱(はづか)しめる事は出來まい？　勿論、そんな事はやる積りもなければ、やれる事でもない。そんなくらゐなら、俺は寧ろ奴が死ぬまでここで暮らさ

せ、奴の遺骸を壁に塗り込めてやる。それなら、どうしようと云ふのか？　どんなに機嫌を取つても、奴は微動だにすまい。金に物を云はせようと思つても、奴は机の上の文鎮の下に金を置きつ放しにした儘だ。要するに、俺にしがみついて離れる氣になれないんだ、それは分り切つてゐる。

とすれば、何か苛刻な、尋常ならざる方策が講じられねばならない。何だと！　まさか警官に捕まへさせて、あの罪なき蒼白な男を州立刑務所に送り込まうなどといふのではあるまいな？

第一、そんな事をやらうとしても、どんな根據があるといふのか？——浮浪者だから、といふのか？　莫迦な！　どうしても動かうとしない彼奴が浮浪者か、放浪者か？　してみると、奴が浮浪者にならうとしないからこそ、俺は奴を浮浪者と看做さうとしてゐる事になる。愚劣極まる。生計の手段が見當らないからといふのは、結構な根據だ。いや、やつぱり駄目だ。だつて、明らかに彼はちやんと自活してゐる。それこそは、奴が生計の手段を所有してゐるといふ事の唯一にして決定的な證據ではないか。それなら、もう萬事休す。奴が出て行かうとしない以上、俺が出て行くしかない。事務所を移さう。俺がどこか別の場所に引越して、しかる

後、奴が俺の新しい事務所にゐるのを見つけたら、ただの不法侵入者として訴へてやると、はつきり通告してやるのだ。

かういふ考へに從つて、翌日、私は彼に次のやうに申し渡しました。「事務所が市廳舍から遠すぎるし、空氣も良くないと思ふ。で、簡單に云ふと、來週、私は事務所を移轉する事にした。君にはもう働いて貰はなくていい。今の裡に云つて置くから、君は別の働き口を探して欲しい」。

返答は無く、話はそれだけで終りました。

豫定の日に、私は荷車と運送人を雇つて事務所に向ひました。家具は僅かしか無かつたので、運び出しの作業は二三時間で全て終了しましたが、その間中、バートルビーは衝立の後ろに立ち盡した儘でした。衝立は最後に運び出すやうに、私は指示してゐましたが、それも取り除かれて、巨大な二つ折本のやうに折り畳まれると、何もないがらんとした部屋の動かざる居住者として、バートルビー一人が殘されました。私は出入口に立つて暫く彼を見詰めてゐましたが、内なる何ものかが激しく私を咎(とが)めました。

私は片手をポケットに入れて——そして——そして心臓が口の中に飛び出て來るくらゐ狼狽(らうばい)

しながら、もう一度部屋に入つて行きました。

「左様なら、バートルビー。私はもう行くよ――左様なら、神の御加護を。これを取つてくれ」、さう云ひながら、彼の手に何がしかの金をそつと渡しました。しかし、それは床の上に落ち、それから――語るも不思議な事ながら――あんなにも縁を切りたいと思つた當の相手から、私は身を振り切るやうな思ひで別れたのです。

新しい事務所に落著くと、一二日、私はドアに鍵をかけた儘にして置き、廊下に足音が聞える度にどきりとしたものです。僅かな時間でも留守にした後、事務所に戻ると、私は敷居で一瞬立ち止まり、鍵を差込む前にじつと聞き耳を立てる始末。けれども、無用な懸念でした。バートルビーは決して私の近くには來なかつたのです。

萬事うまく行つてゐるやうだなと思つてゐたら、取り亂した様子の見知らぬ男が訪ねて來て、ウォール街某番地に最近まで事務所を借りてゐたのは貴方か、と訊ねる。

惡い豫感で胸が一杯になりながら、その通りですと私は答へた。

「それならば」と、この見知らぬ男は、やはり法律家といふ事でしたが、云ひました。「向うに殘して來た男に責任を執つて貰はないと。何しろ、筆寫の仕事は一切拒絶するし、何をする

のも拒んでゐます。その氣になれない、と云つて、事務所を出て行くのも拒んでゐる」。
「それは大變お氣の毒だ」と、平靜を裝ひつつも、內心ひどく戰きながら、私は云ひました。
「しかし、實の所、貴方の仰る男は私とは何の關係もありません。責任を執れと仰るが、親戚でもなければ徒弟でもないのです」。
「一體、何者です？」
「どうにも申し上げやうがない。あの男の事は何も知らないのです。前には代書人として雇つてゐましたが、ここ暫くは何の仕事もして貰つてゐません」。
「それなら、私が始末をつける事にしませう——お邪魔しました」。
數日が經ちましたが、私の耳には何も聞えて來ません。前の場所を訪ねて、可哀想なバートルビーに會ひに行つてやりたいと、そんな憐憫の情に驅られる事も屢々でしたが、何か自分でもよく分らない心の拘りがあつて、それが私をためらはせました。
それからもう一週間經つて、何の知らせも屆かなかつたので、やうやく私は、もう彼の事は終つたのだと考へました。處が、その翌日、私が事務所にやつて來ると、ひどく興奮してゐる數人の男達が戶口で待ち構へてゐたのです。

「あの人だ――ほら、やつて來る」と、先頭の一人が叫びました。以前、一人で私を訪ねて來た例の法律家でした。

「すぐに連れ出して下さい、あの男を」と、恰幅の良い一人が進み出て、叫びました。ウォール街某番地の家主でした。「ここにゐる方達は私の店子の皆さんですがね、もう我慢ならないと仰る。Bさんが」と、例の法律家を指差しながら彼の曰く、「彼奴を部屋から追ひ出したのですが、さうしたら彼奴は、今度は建物のあちこちに出沒して、晝間は階段の手すりに坐り、夜は玄關口で眠ると來る。しつこいつたらない。みんなとても氣に懸けてゐます。客の足は遠のくし、暴力沙汰でも起るんぢやないかと心配してゐる人もゐる。あんたに何とかして貰はないと、それも、今すぐに」。

こんな風に捲し立てられ、茫然自失、私はたぢたぢとなつて、いつそ新しい事務所に逃げ込んで閉ぢ籠つて仕舞ひたいと思つたくらゐです。私はバートルビーとは何の關はりもない――他の誰もが關はりがないのとちつとも變りないと、いくら云ひ張つても無駄でした。無駄な筈です――私は彼と何らかの關はりを持つた事が知られてゐる最後の人間でしたから、彼等は私に嚴しく責任を問うて已まなかつたのです。さういふ次第で、新聞沙汰になるのを恐れて（そ

れとなくその場の一人から脅されました)、私はこの一件についてあれこれ考へた末、例の法律家にかう云ひました。私がかの代書人と二人切りで、貴方の部屋で面談する機會を與へてくれるならば、今日の午後にでも、みなさんが苦情を訴へてゐる厄介者を除去すべく全力を盡しませう、と。

階段を昇つて古巣に行つてみると、踊り場の手摺りにバートルビーが默つて坐つてゐました。

「バートルビー、ここで何をしてゐるんだね？」と私は云ひました。

「手すりに坐つてゐます」と、彼は穩やかに答へました。

私は手招きして、バートルビーを法律家の部屋に入らせると、法律家は席を外しました。

「バートルビー」、と私は云ひました。「君が事務所を追ひ出されてからも、玄關口にゐ續けてゐるために、私がどんなに惱ましい思ひをさせられてゐるか、分つてゐるかい？」

答へはない。

「今はもう、二つに一つの道しかない。君が何かをするか、君に何かがされるか、だ。さて、そこで、君はどんな仕事がやりたい？　もう一度どこかで筆寫の仕事をやる氣にはなれるかい？」

「いいえ。今の儘を何も變へる氣にはなれません」。
「衣料品店の店員はどうかね？」
「縛られ過ぎると思ひます。いいえ、店員をやる氣にはなれません。でも、選り好みはしませんけれど」。
「縛られ過ぎるだつて」と、私は叫びました。「君はいつだつて自分で自分を縛りつけてゐるぢやないか！」
「店員になる氣はありません」と、こんな詰らぬ問題はさつさと片付けて仕舞ふのだとでも云ひたげな口調で、彼は答へました。
「バーテンダーの仕事なんかどうかね？　目を酷使する事も無いよ」。
「まるでその氣になれません。尤も、前に申し上げたやうに、私は選り好みしませんけれど」。
いつになく口數の多いバートルビーに元氣づけられて、私は攻撃を繰り返しました。
「それなら、商店に委託されて、集金のために國中を旅して回るなんてのはどうだい？　健康にいいぞ」。
「いや、何か他の仕事なら、その氣になれるのですが」。

「それぢや、ヨーロッパ旅行の附添人になつて、どこかの若紳士の話相手になつてやる――こんなのはどうかね？」

「まるで駄目です。確固たるところがあるやうな氣がしません。僕は動かないでゐたいんです。でも、選り好みはしませんが」。

「それなら、動かないでゐるがいい」と、今や堪忍袋の緒も切れて、私は叫んだ。彼と附合つてゐる裡には隨分苛々する思ひをさせられたものですが、こんなにも激昂したのは初めてです。「夜になる前に君がここを出て行かないと、俺の方が――で――で――出て行かなくちやならなくなる――いや、どうしたつて、出て行くぞ！」何だか隨分妙な締め括り方になりましたが、どうしても動かうとしない彼をたぢろがせて、こちらに從ふ氣持にさせるためにはどんな脅し方をしたらいいのか、さつぱり分らなかつたのです。これ以上幾ら頑張つても無駄だと思つて、唐突に部屋を出て行かうとした時、究極の名案が閃きました――とは云へ、それまで一度も考へた事がない譯ではありませんでしたが。

「バートルビー」と、こんなに氣持の昂ぶつた狀況では精一杯優しい調子で私は云ひました。

「それなら、私と一緒に歸らないか？――事務所にぢやなくて、私の家に――そして、ゆつく

り暇を見て相談して、君の身の振り方に結論が出せるまでゐてくれたらいい。さうしよう、さあ、今すぐ行かう」。

「いえ、今はこの儘の狀態を何も變へる氣になれません」。

私は何の返事もしなかつた。しかし、いきなり、素早くその場から驅け出して、みんなから上手に身を躱(かは)し、建物を飛び出してウォール街をブロードウェイに向つて走り、最初に來た乘合馬車に飛び乘つて、やがて無事追跡の手から逃げ果(おほ)せたのでした。心の落著きが戻つて來るや、私は家主と店子達の要求の點に關しても、バートルビーを助けて粗暴な迫害から守つてやりたいとの私の欲求及び義務感の點に關しても、やれるだけの事はやつたのだと、はつきり自覺しました。今や思ひ煩(わづら)ふのは一切止めにして、靜かな心でゐようと努めたのですが、良心はさういふ私を是認してくれました。尤も、現實には、さういふ努力が私の望むやうな具合にうまく行つた譯ではありません。激怒する家主と苛立つ店子達によつて再び驅り出される事を私はひどく恐れてゐましたから、數日間、仕事をニッパーズに任せ切りにして、市の北部や郊外を自分の四輪馬車で走り回つてゐたのです。川向うのジャージー・シティ（ニュージャージー州北東部の港市。ハドソン川を挾んでニューヨーク市と相對してゐる）とホーボーケン（ジャージーシティに隣接する都市。）に渡つてみたり、マンハッタンヴィル（ニューヨーク市ウェストサイドの一畫）とア

ストリア（ニューヨーク市クィーンズ區の一畫）に逃避行をしてみたり。實際、この頃の私は殆ど四輪馬車の中で暮してゐたと云つてよいくらゐでした。

さうして事務所に戻つてみると、何と、家主からの手紙が机の上に。震へる手で開封してみると、家主が警官を呼んで、バートルビーを浮浪者としてかの「墓場」に收監させたといふ文面でした。また、他のなんぴとよりも彼の事を知る貴君が自ら「墓場」に出頭して、事實關係について然るべき供述をして頂ければ有難いとも書いてありました。それを讀むと、私は矛楯した感情を懷かされました。最初、私は腹を立てたのですが、結局は殆ど是認する氣持になつたのです。血の氣が多くて逡巡を嫌ふ性格の家主でしたから、私ならとても決斷出來ないやうな處置を採るに至つたのでせう。けれども、かくも特異な狀況の下では、最後の手段としてこれしか採る道はなかつたのかもしれません。

後に私が聞き知つた所では、哀れなバートルビーは「墓場」に連行されねばならぬと告げられた時、少しの抵抗の氣配も見せず、蒼褪めた顏色の儘、動搖の色も示さずに、默つて云はれる通りに振舞つたとの事でした。

同情心や好奇心に驅られた見物人が何人か一行に加はり、警官達の一人がバートルビーと腕

を組んで先頭に立つて、無言の一團は眞晝(まひる)の大通りの雜踏の喧騷と熱氣と歡樂の只中を進んで行つたといふ事です。

手紙を受取つたその日、私は「墓場」に、より的確に云へば、「正義の殿堂」に赴きました。係の役人をみつけて用向きを述べると、私の云ふ人物は確かに收監されてゐるとの返事でした。そこで私は係官に、バートルビーがどこ迄も眞つ直ぐな人間で、いかにも譯の解らぬ變人ではあるものの、大いに同情されて然るべきだと斷言し、知つてゐる事のありつたけを語つて、最後に、いづれもつと寬大な處置が採られる迄は、出來るだけ緩(ゆる)やかな拘束の狀態に止め置くのが好ましいのではあるまいかと提言しました——尤も、そのもつと寬大な處置なるものがいかなるものか、私にはさつぱり見當がつきませんでしたが。いづれにせよ、他に採るべき處置が決定されない場合には、救貧院に受け容れて貰ふしかない譯です。私はバートルビーに會はせて欲しいと賴みました。

バートルビーは恥づべき罪責を問はれてゐる譯でもなく、終始どこ迄も穩やかで無害な樣子だつたため、刑務所中を、取分け、四方を壁が圍(かこ)む芝の生えた小さな中庭を、自由に歩き回る事が許されてゐました。さういふ次第で、その中庭で私は彼をみつけた。中庭の最も靜かな場

所に獨りぽつねんと佇んでゐて、高い壁に顔を向けてゐたのですが、一方、中庭を四方から取り卷く獄舍の窓の細長い隙間を通して、人殺しや盜人の目がじつと彼に注がれてゐるのが見えるやうな氣がしました。

「バートルビー！」

「貴方の事は知つてゐる」と、振向きもしないで彼が云ひました。「貴方に云ひたい事は何もない」。

「バートルビー、君をここに連れて來たのは私ぢやない」、疑心をそれとなく示す彼の言葉に鋭い胸の痛みを覺えながら、さう私は云ひました。「それに、君にとつて、ここはそんなにひどい場所でもないだらう。ここにゐるからといつて、君に汚名が著せられる譯ぢやない。さうだらう、世間が云ふほど、そんなに慘めな所でもない。ほら、見給へ、空もあれば、ここに芝生もある」。

「自分がどこにゐるかは分つてゐます」と彼は答へましたが、それ以上は何も云はなかつたので、私は彼を殘して立去りました。

建物の中に戻ると、廊下のところで、肩幅が廣く肉附きのいいエプロン姿の男が近づいて來

て、肩ごしに親指をぐいと背後に突き出して云ひました、「お知合ひかね？」

「さうだ」。

「あの人、飢ゑ死にが望みかね。さうだつたら、刑務所の飯だけ食つてれば、望み通りつて譯だ」。

「君は誰かね？」こんな場所で、役人らしからぬ口の利き方をする男をどう考へたらよいか解らず、私は訊ねました。

「食ひ物屋でさあ。ここにお知合ひのゐる檀那方に雇はれて、何か美味いものを差入れる商賣で」。

「本當かね？」と、私は看守の方を向いて云ひました。

その通り、との返事でした。

「さうか、それなら」と私は云つて、食ひ物屋（ここではさう呼ばれてゐるのです）に銀貨を何枚か手渡し、かう云ひました。「あそこの私の友達に特別氣をつけて貰ひたいんだ。とびきり上等のご馳走を食べさせてやつてくれ。そして、出來る限り丁重に扱つてやつて貰ひたい」。

「紹介して貰へますかい？」と食ひ物屋は云つて、己れの育ちの良さの證據を示す機會が待ち

切れないと云はんばかりの表情で、私の顔を見詰めました。
　さうした方がバートルビーのためにもならうと思ひ、私は頷(うなづ)いて、食ひ物屋に本名を訊くと、連れ立つてバートルビーの許に行きました。
「バートルビー、カツレツさんだ。とても力になつてくれると思ふよ」。
「力になりますとも、どうぞ使つてやつて下さい」と食ひ物屋は云ふと、エプロンをつけた身體を大きく折り曲げて御辭儀をして曰く、「ここの暮しが御氣に召して下さればよろしいが。綺麗な御庭に――涼しい御部屋――どうか暫く御逗留(とうりう)なさつて下さいまし――快適に過されるやう努めますので。願はくば、家内と二人でディナーに御招待したいもの、場所は家内の私室では如何で？」
「今日は食事をする氣になれません」と、顔を背けながらバートルビーが云ひました。「身體によく無いでせうから。御馳走には慣れてゐないのです」。さう云ふと、彼は中庭の反對側に向つてゆつくりと歩いて行き、窓の無い壁と向ひ合ふ姿勢を取りました。
「どうなつてるんで？」と、食ひ物屋はびつくりした目付で私を見詰めながら云ひました。
「變つてますね？」

「少々、狂つてゐると思ふ」と、私は悲しげに云ひました。

「狂つてゐる？　狂つてるんですかい？　參つたね、おいらてつきり、お前さんのお友達は文書僞造で取つ捕まつた檀那とばかり思つてゐた。顏色が惡くて御上品ぶつてると、相場が決つてますからね、僞造犯といふやつは。可哀想な連中ですよ――本當に氣の毒だ。モンロー・エドワーズ（ニューヨークの資本家。一八四二年、センセーショナルな裁判で、僞造罪に問はれ、有罪判決を受ける）の事、御存知でしたか？」と、いかにも痛ましげに彼は云ふと、一息入れ、しかる後、私の肩に悲しげに片手を置き、溜息（ためいき）をついて云ひました。

「奴はシング・シング（ニューヨーク州立刑務所）で肺病を患つて死にました。で、モンローとはお知合ひぢやなかつたんで？」

「ああ、僞造犯との附合ひは全く無いね。でも、もう行かないと。あの友達の事、よろしく賴む。御禮はするから。ではまた」。

數日後、私は再び「墓場」に入る許可を得て、バートルビーを探してあちこちの廊下を回つてみましたが、見つける事が出來ませんでした。

「さつき、獨房から出て來るのを見ましたよ」と看守が云ひました。「中庭をぶらつきにでも行つたんでせう」。

私はそちらの方に行つてみました。

「あの無口な男を探してゐるんで？」と、通りがかつた別の看守が云ひました。「向うで横になつてゐますよ――中庭で睡眠中。二十分も經つてゐないな、彼が横になるところを見かけてから」。

中庭はとてもひつそりとしてゐました。一般の囚人は入れない場所なのです。四圍（しゐ）を取卷く壁はびつくりするほど分厚くて、外から來る音を全て遮斷してゐましたが、エジプトの石の建造物を思はせるその造りが暗く重たく私にのしかかつて來ました。しかし、足の下には柔らかい芝草が、中庭に閉ぢ込められて生えてゐました。そこは永遠なるピラミッドの奥の奥とも思へるやうな場所でしたが、何やら不可思議な魔術によつて、石の割目を通して鳥が落した芝草の種が芽を出してゐたのです。

壁の手前で何とも妙な恰好で縮こまつて、兩方の膝を折曲げ、横向きになつて、冷たい石の床に頭を置いて横になつてゐる窶（やつ）れ果てたバートルビーの姿が見えました。ぴくりとも動きません。私は立止まり、それから近づいて行つて、屈（かが）んで見てみると、どんよりした兩の眼が開いてゐる。その點を除けば、ぐつすり眠り込んでゐるやうに見えました。彼に觸（さは）るやうにと、

私は何かに促され、彼の手に觸つてみると、ぞくつとするやうな戰慄が私の腕を驅け上り、背骨を傳はつて足先まで驅け下りました。

すると、食ひ物屋の丸い顏が私を見てゐて、云ひました。「食事の用意が出來ました。今日も食事をしないんですかね？　それとも、食べないで生きてゐるんですかい？」

「食べないで生きてゐるんだ」、さう云つて、私は眼を閉ぢてやりました。

「ええつ！――眠つてるんですよね？」

「さう、世の君達臣達（きみたちおみたち）と偕（とも）に」（舊約聖書「ヨブ記」第三章第十四節）と私は呟きました。

＊

この物語をこれ以上續ける必要はありますまい。哀れなバートルビーの埋葬について語るとすれば侘びしいものになるしかありませんが、それは容易に想像出來る事でせう。しかし、讀者と御別れする前に、一つ申上げて置きたい事があります。讀者がこのささやかな物語に興味を持たれ、一體バートルビーとは何者なのか、そしてまた、彼が語り手たる私と知合ふ以前に

はどんな生活を送つてゐたのか、といふ問題について好奇心を呼び覺されたとしても、私としてはただかう御答へするしかない。すなはち、私自身、さういふ好奇心は十分持合はせてゐるが、それを滿足させる事は全く不可能である、と。けれども、ここで御披露すべきかどうか些か逡巡せざるを得ない、ちよつとした風聞があります。バートルビーが死んで數箇月經つて私の耳に屆いたものです。それがいかなる根據に基くものか、何も確かめる事が出來ませんでしたから、從つてその信憑性についても、今、私は何も申上げる事は出來ません。ですが、この曖昧模糊たる風聞が、私にとつては何かしら妙に示唆に富むものと思はれ、興味を覺えない譯でもなかつたので、いかにも哀れを誘ふ風聞ではありますが、私と同じやうに感じられる向きもあるのではないかと思ひ、手短かに申上げて置く次第です。風聞とはかうです。バートルビーはワシントンの「配達不能郵便物係」（the Dead Letter Office）の下級職員だつたが、組織の運營方針の變更があつて突如解雇されたといふのです。私はこの風聞について思ひを運らす時、曰く云ひ難い强烈な感情に捉へられます。配達不能の死せる郵便物（Dead letters）！　まるで死せる人間（Dead men）みたいに響きませんか？　生れつきでもあるし、身の不運も手傳つて、ともすれば絶望感に苛まれ、生きる意欲を失ひがちな人間の事を考へて御覽なさい。來

る日も來る日も配達不能の郵便物を扱つて、燒却するため仕分けをするなどといふ作業くらゐ、絶望感を強めるのにふさはしいものがまたとあり得ませうか？　何しろ、それらの郵便物は荷馬車にどつさり積み込まれて、毎年燒却爐送りとなるのです。蒼白い顔の職員は、時折、折り畳まれた便箋の中から指輪を取り出す事もある――それを嵌める筈だつた指は、恐らく墓穴の中で朽ち果ててゐるのでせう。慈善のために特急便で送られた紙幣をみつける事もある――それによつて救はれる筈だつた人は、もはや食べる事もなければ飢ゑる事もない。絶望の裡に死んだ人々に赦しを與へる手紙、希望を無くして死んだ人々に希望を約束する手紙、救はれぬ災厄に壓しひしがれて死んだ人々に吉報を知らせる手紙。命を與へる使命を帶びて、それらの手紙は死の許に急ぐのです。

嗚呼、バートルビーよ！　嗚呼、人間よ！